

2014 年度美術科教育学会リサーチフォーラム in 愛知  
〈美術科教育学会・日本発達心理学会共催シンポジウム〉

アートと心理

ー子ども・環境・保育者の相互作用において生起するアートの心理的プロセスー

2014 年 12 月 6 日 13:30-16:00

相山女学園大学 生活科学部棟 B11

記録：丁子 かおる（和歌山大学）、宮野 周（十文字学園女子大学）

○司会者挨拶 日本発達心理学会 朴 信永 先生

朴先生： みなさん、こんにちは。私は、相山女学園大学教育学部講師をしております、朴 信永と申します。本日は本当に名古屋で今年 1 番寒い日になりましたが、お越しいただき本当にありがとうございます。よろしくお願いします。今回のこのシンポジウムは今年の春、4 月に企画をしました。そこから今日という日を心より楽しみにしていました。このシンポジウムは美術科教育学会の乳幼児造形研究部会、そして日本発達心理学会の国内研究交流委員会の共催シンポジウムとなっております。この共催の企画は両学会の歴史的な観点からみても画期的な試みですし、また保育の視点からみても必然性のあるテーマだと思っております。それではここで、美術科教育学会乳幼児部会部長でいらっしゃいます、塩見知利先生にご挨拶をいただきたいと思います。

○美術科教育学会 乳幼児造形研究部会代表 塩見知利 より挨拶

塩見先生： みなさんどうも、寒い中お集まりいただきましてありがとうございます。先ほども朴先生からご紹介がありましたが、美術科教育学会の乳幼児造形研究部会と、日本発達心理学会の共催ということで、企画をしていただきました。色々な準備をしていただきまして、ありがとうございました。先ほどお昼から打ち合わせがありまして、隣から弁当食べながら聞こえていたんですが、どんな風になるのか僕も楽しみにしております。人数も満員になったら椅子を（追加で）いれようかという話もあったのですが、ちょうど適当な人数でフロアからの意見もいろいろ聞けるかなと思っています。両方の学会としてもなんで今までこういうのがなかったのかなあとと思いますし、近接ではないのかもしれませんが、発達教育において他の所におけない問題ですし、それと美術の方も芸術家の方も関わってくることがたくさんありますので、どうぞみなさん最後まで有意義な会になりますように積極的に発言いただきたいと思います。どうぞ最後までよろしくお願いします。ありがとうございました。

朴先生： ありがとうございます。それでは本日は著名な先生方 5 名をお招きして、お話を聞かせていただきたいと思います。ご紹介させていただきます。まず、東京大学大学院教育学研究科教授でいらっしゃいます、秋田喜代美先生です。相山女学園大学教育学部教授でいらっしゃいます、磯部錦司先生です。鳥取県にある社会福祉法人赤碕保育園の園長先生でいらっしゃいます、福田泰雅先生です。学校法人裕学園谷戸幼稚園の園長先生でいらっしゃいます、伊藤裕子先生です。そして横浜インターナショナルスクール E L C 幼児部のディレクターでいらっしゃいます、カンチェーミ ジュンコ先生です。

それではこれからシンポジウムを始めさせていただきますと思います。先生方、お席へどうぞ。最初に福田先生のプレゼンが始まりますが、テーマは「子どもの主体的な生活とアート」となっております。それではお願いします。

## 実践発表 1

### 「子どもの主体的な生活とアート」

社会福祉法人赤碕保育園園長 福田 泰雅 先生

はい、よろしくお願いします。主体的な生活とアートということなんですけれども、事例としましてはですね、もし私たちが赤ちゃんのように表現できたらというところで、2 年前の実践を発表させていただきます。

赤碕保育園というのは鳥取県の人口 1 万 8 千人ぐらいの小さな町なのですけれども、ここで 110 人定員ということで保育を実践しています。これは、3・4・5 歳児ですね。3・4・5 歳児のクラスの編成の中での実践です。もしも私たちが赤ちゃんのように表現できたらというのは、時代の中で生きられるということも大切なんですけれども、その時代を超えていけるような、そういう風にも育ってほしいなという願いがありました。その 1 番、本源にあるのは赤ちゃんの育ちの中に意図があるのではないかなということで、赤ちゃんのように我々が表現できるとそういう力もまた備わってくるんじゃないかということで、つけたタイトルです。

今日は美術のお話ですけれども、美術ではありますが、実は音楽のところも関わってまして、まあテーマがモーツァルトですからそうなんですけれども、音楽の実践というところでは、非常に今までジレンマを抱えていました。何か既成のものを与えていくだけとか、楽譜がよめるようになるとか、演奏ができるようになるとか、聴衆として過ごすであるとか、なにか分業されていく、そういう音楽の在り方に対して、もっと表現しながら自分も人も楽しめるような、そういう生活というところがあるのではないかと、そういうところでもう少し音楽を楽しめたらどうなんだろうということを考えていたのですが、それがあまり手掛かりがなかったんですね。今まで。それで、ずっと考えてきていたんですけれども、赤ちゃんを見ていきますとですね、環境さえあれば、音を出す環境があつたりだ

とか、音を楽しむ環境があれば、自由に音楽表現し、体も一緒に動かしたりとか、そういうことも赤ちゃんはちゃんとやってるわけです。それがどこで失われていくのか、まあいろいろ理由はあるんでしょうけれども、得に即興的な音を出して楽しむという部分、もちろん様式とかそういうのはありませんけど、そういう即興性のようなところをもっとちゃんと、そのまま生かしていけないのかなというところがありました。それでなんとかそこを打開するようなことをやりたいなと考えていました。ということで、特殊なことは今まであまりやってこなかったんですけど、まあ環境は用意する、音をいつでも出せるような環境はちゃんとしておく必要があるなという風に思って、生活の中で音に触れる機会ではできるだけ保障できるようにしたいとしてきていました。そこで、これは赤ちゃんではないのですけれども、3・4・5歳児の保育の実践の中で、生活の中でですね、2010年の時に、「今日のお天気はどんな音」という、タイトルだけ聞くとなんかよくわからないのですが、そういう実践です。それから、それがヒントになりまして、トカゲに心地よい音楽を聞かせるというのが2011年にありました。そしてこの2012年に五線譜に音を描こうという実践につながっています。2010年度なのですけれども、今日の天気はどんな音ということで、お天気が毎日変化するその不思議さをですね、トピックとして、展開した事例の中で起こったことです。天気が毎日変わっていくのは、なぜなんだろうということで子どもたちは、いろいろ考えます。お天気を決めている、神様がいるのだと。空の上にいると。それでですね、100均で買ってきた、コップがあってそこに晴れとか曇りとか雨とか、そういうお天気を決めるボタンがついているのだと。そこで、ボタンを押して決めていると。で、時々雷様と雲の上でバスケットボールとかしていてドカンと落っこちてくるのだと。なんかそういうようなお話をですね、自分たちでどんどん膨らませていって、それで、じゃあそれについてそれがだんだんお話になってきたので、そんな詩をつくって、それに音楽をつけてみたいなことをやり始めたんですが、ふと部屋の中にある楽器と子どもたちとの様子を見てですね、ちょっとふって見たんですね。「じゃあ今日のお天気ってどんな音がするんだろうね」と言うと、3人ぐらいの子どもだったんですけど、そこにある楽器をひょいっと持って、それで「ダンダカダー」とか「ドコドコドー」とかいろいろ工夫して自分なりの音を出して、「今日の天気はねこんな感じ」と言って音を出して、みたわけですね。「あっなんだ、即興演奏ってこんなに簡単に子どものなかではできることなんだ」と思って、「じゃあ、もっと身近なものにできるようにしたいな」ということがあって、それから、まあ、何回かはお天気を題材にして今日のお天気はどんな音ということで何日かやったりもしてみました。そして、翌年の2011年度、この年は年長児が特にそうだったのですが、トカゲにはまってまして、トカゲをとにかく捕まえたり捕まえてもらったりしながら名前をつけて、自分のトカゲとして自分の生活の中で一生懸命愛情を持って、飼育していたんですね。で、その時に子どもたちの話の中で、「トカゲに耳がないんじゃないか」という話が出まして、「トカゲの耳ってどこにあるんだろう、ないような気がする」とか、ということがありました。それで、子どもの中から、「いや、音をきかせてみれば、そっち向くんじ

やないか」って言って、それで、「音をきかせよう」と言って、今、写真にあるようにですね、ちょっとこれでもわかりにくいのですが、トカゲを外に出して、周りでみんなが楽器を持って音を出してきかせてみようと。いい音の方に向くんじゃないかとかって言って、それで楽しんでたわけですね。そういう探究ということもありました。そういう中での即興というものもありました。そして、2012年度、モーツァルトのプロジェクトが始まったんですが、部屋の本棚から、モーツァルトの伝記小説があったんですが、毎日このモーツァルトの伝記小説が気に入っている子がいて、何回も何回も「読んでほしい」と担任のところに持ってきてたわけですね。そしてそのモーツァルトの伝記小説を読みながら、その中に書いてある、生活の中で聞こえてくるさまざまな音、小鳥のさえずりや水や風の音を聞いて、モーツァルトは音楽をつくってきたということがそこに書いてあったわけですね。それでまた音に関心が向いて、それでうちに帰ってもモーツァルトを真似て遊んでいる子もその中で出てきた、ということです。そして園の生活の中では、昼食の時に、CDをかけてモーツァルトの曲をかけたり、それから他の作曲家ですね、まあ、クラシックの作曲家とかの演奏を、きいたりもししてみました。そして、あるときキラキラ星変奏曲を聞いたとき、この楽譜が家にあるといった子があって、それから楽譜に興味に向いてきたわけですね。で、楽譜を持ってきて、「楽譜ってこんな風になってるんだね」ってみんなが見て、それで画用紙に五線譜を書いて、そこに音符のようなものをかいて遊ぶという、そういう遊びが始まりました。それが、モーツァルトが本当にやっていたかどうかは知りませんが、雨の日とか外に出かけて行ってですね、どんな音がするのか、というのを聞いてみるという。雨の音ということで、みんなが自分に聞こえた音を、ずっと五線譜に書いてみるということが始まったわけです。これはその時の聞こえた音の感じですね。「ダンダーン」とか、「太鼓のようなおとがする」とか、「ドンドンドン」とか、「ザー」とか、「ポタポタ」とかいろいろ聞こえてくる音を、口々に表現してみた。それでみんなで今度は五線に聞こえてきた音を、ちょっとこう音符のように再現してみようということで、画用紙の上にかいていました。まあこんな感じですね。まあ、もちろん完全な楽譜になっているわけではありません。ただ、画用紙の上に五線がひいてあるという、そこに音符らしきものを自分で書き込んだというだけのものではありません。これが結構楽しくて、これをずっと続けていたんですけれども、その子どもがかいた音を、五線譜をですね、ちょっとピアノで音を出してみようということをやってみまして、ちょっと私もちょちょっと「この五線はこんな風な感じの音がするような気がする」と言って、ピアノでちょちょっと音を出してみて、担任もそれをひいてみて、というそういうことをやってみたところ、なんかこう「汽車の音がする、汽車の音みたいだ！」という風に言った子がいたんですね。それで担任は「汽車の音みたい」って、「こういう音がするのか、ききに行ってみたいね」とって、行くことになりました。実はですね、担任はクラシック音楽はすごく苦手で、出来れば逃げたい。モーツァルトと言ってオーストリアって書いてあるにも関わらず、オーストラリアと勘違いして、「オーストラリアにはなにがいるんだろうね？ コアラ、カ

ンガルー？」とか言っていて、「それ違うから早く訂正しなさい」って言ったぐらい、あまりクラシックっていうものに関心がなかったんですが、私と研究主任と担任とで話をして、これはおもしろいからこのまま続けようということと言ってたんですね。しかし、この「汽車の音みたい」という言葉をきっかけに、実は逃げたかったんですね。逃げる口実にしたかったと。で、出かけていくのですが歩いている最中に音が聞こえてくると。遠くから音が聞こえてきたときに、子どもたちが気付いて、「なんの曲だろう？」っていう話になりました。「モーツァルトじゃないか？、そういう音がする」とか、「バイオリンの音がする」とか、そういうことを言い始めましてですね、「そんな馬鹿な！？」と思って、担任もまあ（そんな）「馬鹿な！？」と思ったんですが子どもたちと一緒にその音がする方に出かけていきました。そうするとですね、鳥取県は梨がたくさんとれるんですが、梨畑からモーツァルトが本当に聞こえていたんですね。流れていたんです。そのおじいさんのところに行くと、「このモーツァルトの音楽を梨の葉っぱに聞かせると、元気になっておいしい梨がとれるんだ」という、そういう風な説明をうけたようです。実はここにあるようにですね、CDがちゃんと出ているんですね。農業用CDですね。育成する、そういうものが出ていたそうです。そういうことであっさりと引き戻されたということです。そうしていると、結局、今までも散歩に出ているんです。その近くもずっととおっているんですけど、まったくそのところでは、子どもたちも先生も気付いてないのですね。音は多分耳には入っていたのでしょうけれども、意識してないわけです。ところがやはりモーツァルトというキーワードでいろんな音楽をきき始めたりしていると、きこえてくるようになっていくという、これはちょっとおもしろいなあ、というのがあって、「意識するというのはすごく大切なんだけど、怖いですよ」って担任は言っていました。それからこれはおもしろいという話になりましてですね、もう一度、やっぱりいろんなことを深めてみようということになりました。それで現代音楽とかで結構、図系譜っていう最近はあんまり使わなくなったかもしれませんが、グラフィックスコアというものがあってですね、1960年代とか70年代とかのころは盛んに、五線譜になっていたり、なっていなかったり、まあ絵画的なもので約束がきちっとあってですね、それに従って音を出していくというようなそういう現代音楽の在り方でありましたし、それから偶然性というところを非常に大事にしていた、そういう音楽の時期もありまして、まあ、今もあるのですが、そういうところで、グラフィックスコアというものがなされて盛んに使われていたんです。そこにヒントを得ました。それで、どうせ五線譜って、結局、約束事なんだから、だからそれはまあ約束事として、我々も使おうと。五線譜の上に音符らしきものを描き出して、聞こえてくる音をそこに表現していったらそれで楽しいんじゃないのかなって、そういう風に考えてもっと自由にそれを使っていこうというように話しました。これがそういう風な流れの中で出てきた作品です。葉っぱを集めてきたものを使って描きだしているんですね。なんか音楽が聞こえてきそうな気がします。で、楽譜をですね、盛んにかくようになりました。これはおもしろいということで、きこえてくる音を描くというと、ある子は、すぐ部屋の前に、こういう

絵がかけるとような準備をしているんですが、そこでかきながら「先生これ、ブーって聞こえる音を描いた」とか言って、それは左上にあるようにエアコンの室外機なんです。「室外機から聞こえてくる音を自分はかいたよ」って言うんですね。これがその作品です。なんとなく無機質な雰囲気もちょうとあるのですが、カラフルでなかなか楽しい絵になります。まあこういう遊びをですね、ずっと続けてきました。それで思い思いに、音を出してみたり、聞こえてくる音を作品にしていったりという、遊びがどんどん広がりました。大きな五線譜を用意してそこにみんなで描きこんだり、迎えにきたお父さんに自作の曲を披露したりとか、そういうことも始まりました。風の音とか雨の音とかを、3歳児なんですけれどもこれを描き出しています。「風の音」ですね、これは園庭に出かけて行ってですね、聞こえてきた音を本当に描きだしているんですが、こういう風にクローバーを使って、これが「風の音、シュー」っていう作品なんですね。それから、これは無題なんですけれども、たくさん周りから聞こえてくる音を描きだしたものです。それからこれは3歳児ですが、「セミの声」ですかね。なんとなくそういう感じがしますね。これも無題ですが、すごく楽しそうな音が聞こえてくるような感じです。これも、「ブランコの音」だというんです。「音は聞こえないけど」って本人も言っていました。でも、こういう感じ、リズムが少し出てきたりだとかして、これもなかなかいい感じの絵になっています。で、運動会でも、「じゃあ、もっと派手にどんどんやってみるか」ということで、運動会に競技として取り込んで、こんな感じで大胆に遊んでみたりもしました。で、五線に書いたようにですね、少しずつ音にする子が出てきました。お話に音楽をつけるということを遊びにし始めた子もいます。絵本をひらいてそこを見ながらピアノをひいているので担任が、「なにを弾いてるの？」って聞いたら、「ここ！」、といってひらがなの部分を指したそうです。「昨日は絵のところに音をつけていた」、って言ったそうです。あとは、給食とかで出てくる、空容器を使ってそれで音をちょっと出してみると、カエルの鳴き声みたいだ、とかそういうことが子どもたちの間にどんどん広がって、音を出して楽しむというところがどんどん広がってっていきます。こういうことが起こったという事例として、提供したいと思います。以上です。どうもありがとうございました。



## 音を楽しむ

- 音を出す楽しみは、どこへ消えたのか？
  - 音楽は分業されている
    - ・ 作曲家、演奏家、聴衆
    - ・ ほとんど子どもたちは、既製の音楽をなぞらされるだけになる
  - 我々は音楽でもっと楽しめる
    - ・ 分業されたとしても、もっと日常生活の中で音楽を楽しみ、充実することは可能

## 赤ちゃんのように表現できたら

- 赤ちゃんは、音楽的環境に触発され、自由に音楽表現をしている
  - 赤ちゃんは分業しないで音表現そのものを楽しんでいる
  - 赤ちゃんの表現は即興的である
  - その即興性はどこへ消えたのか！
    - ・ 音楽表現は、教育の中で楽譜に縛られるようになったころ、嫌いなもの、苦手なものに変化する

## 即興としての音表現のために

- 環境
  - 環境に触発されて表現する
    - ・ 保育の中で音をいつでも出せる環境が必要
- 音を出して表現する場面・状況
  - 日常的な保育活動の中でもそれらは見出すことができる
    - ・ 今日のお天気はどんな音？（2010年）
    - ・ トカゲに心地よい音楽を聴かせたい（2011年）
    - ・ 五線譜に音を描こう（2012年）

## 2010年度 今日の天気はどんな音

- お天気が毎日変化する不思議さをトピックとして展開した活動。
- 自然観察だけではなく、お天気を決めている神様や雷様などを想像しながら歌を作ったり、今日のお天気はどんな音がするのかなどを題材にして即興演奏を楽しんだ。



## 2011年度 トカゲの好きな音は？

- 愛情をこめて「トカゲ」を飼育し、仲間と共にトカゲの生態や死などに触れ、自分たちの生活と関連させながら、長期間にわたって探求した年長児たちの活動。
- その中でトカゲの聴覚について、様々な音楽を聞かせることで探究した。



## 2012年度 モーツアルトのプロジェクト (3,4,5歳)

- 部屋の絵本棚から伝記小説の『モーツアルト』を持ってくる。「モーツアルトって何？」と疑問が湧き、その日から、何度も読んでほしいと持ってくる
- モーツアルトは幼い頃に生活の中で聴こえてくる様々な音(小鳥のさえずり、水や風の音)を聴いて音楽を作ってきた事を知る
- 家庭でも、モーツアルトを真似て遊んでいた子もあった(例えば、コップを叩いて音を出してみる)

- 昼食中にもCDでモーツアルトその他の普段なじみの少ないクラシック音楽を聴いた
- 『きらきら星変奏曲』を聴いたとき、R・Kさんが「楽譜あるよ、きらきら星の。」と話した
- それをきっかけに楽譜に興味を持ち始め、楽譜を持ってきたり、音符を描いたりするようになった

## 雨の音

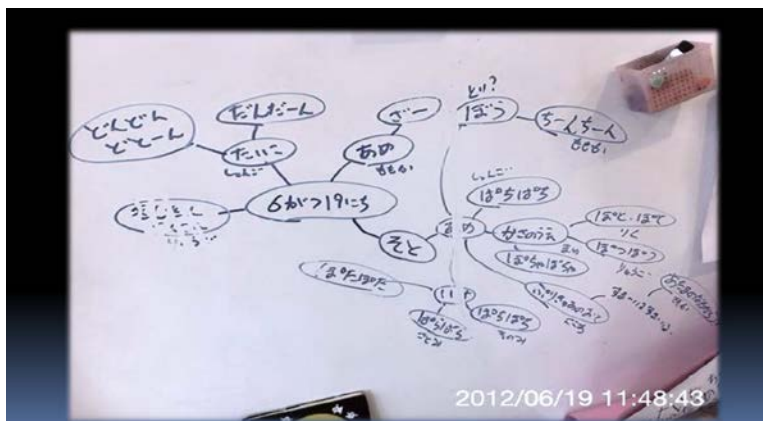
- 雨の日。“雨の音”に耳を傾けてみる事を提案する。積極的に外に出て行き、“雨の音”を感じる。
- 保育士が五線譜を用意すると、聴いた音を描きに集まって来る。これをきっかけに、“聴いた音”を五線譜に描く活動が始まる。



2012/06/19 10:51:01



2012/06/19 10:51:19



S・Mくん「モーツァルト。だってバイオリンの音がする。」

- 音の正体を探しながら歩いていくと...梨畑から曲が聴こえてくる。
- 畑仕事をしているおじいさんに話を聞くと、モーツァルトの曲であった。
- おじいさん；「このモーツァルトの曲を梨の葉っぱに聴かせると元気になるんだよ。」



#### 【保育士の振り返りと考察】

- 保育士が気が付かなかった微かな音に気が付き、その音の正体を探していた。
- “音”を意識して生活する中で、この微かな音にも気が付いたのでないだろうか。



- 偶然モーツァルトの曲が聴こえてきたことに驚きながらも、その曲が聴こえた喜びも見られた。
- その後、デッキの前に移動し五線譜に絵を描いたり、葉っぱを貼り付けたりして楽しんでいった。



#### 「図形譜（グラフィック・スコア）」

- その後「図形譜」にヒントを得て、五線譜という音楽を象徴する枠を設け、聴覚的に聞こえてくる音や感覚的にとらえた音などを自由に絵として描く活動を始めた
  - 即興演奏へとつながることを期待していた

・注：「図形譜（グラフィック・スコア）」

- 従来の五線譜だけでなく、自由な図形あるいは色などを用い書かれた楽譜。武満徹、ジョン・ケージ、クセナキスなど現代音楽の作曲家が用い、偶然性による音楽表現を求め、しばしば使われる。

7月19日 葉っぱの音楽



2012年7月23日 「楽譜」描いたよ

- S・T(年長児)さん「先生。楽譜描いたよ。」
- 担任「今日は何の音を描いたの？」
- S・Tさん「その機械から聴こえるブーっていう音を描いた。」

【保育士の振り返り】

- 保育士は完全に意識をしていない音だった。どのような状況でも、耳を澄まして“音”を意識すると、音が聴こえてくるといふ、音の世界の広がりを感じた瞬間だった。





大きな五線譜に描いてみよう



お迎えの時お父さんに披露



## 風の音、雨の音



2012年7月25日(水)

## 「風の音。シューって音」

- S・Yさん「お外行きたい」
- 担任「外でなにをするの？」
- N・Uさん「ブランコとか、したい」
- S・Yさん「お外の風の音とか聴きた〜い」



- 担任「そっか。みんな外に行きたいんだ。じゃ、Sちゃんみたいに色々な音を聴いて楽譜描きたい人、他にもいる？」
- K・Hさん、M・Rくん、K・Sさん「はい！」
- その後、楽譜を描きたいと言った4人は、アトリエに集合する。
- R・Mくん：茶色の瓶を手に持って「あれ〜これ水しか入っていない」
- 担任；「Rくん、茶色で描きたいの？」
- R・Mくん「うん。セミの音を描くけ。」

風の音 シュー



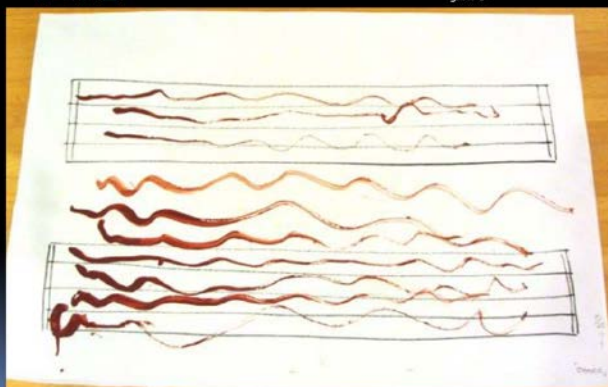
無題



4歳児

セミの音

3歳児





5歳児

ブランコの音「音は聞こえないけど」

5歳児



運動会の競技として



### 五線に描いた絵を演奏する



- その後、絵本を見ながら、絵や物語に即興的に演奏する子も現れた

### 五線に描いた絵を演奏する



- その後、絵本を見ながら、絵や物語に即興的に演奏する子も現れた

### お話に音楽をつける遊びが始まる。

- 絵本を開き、その開いたページを眺めながらピアノを弾く。
- 担任「何を弾いているの？」
- U・Nさん「ここ(ひらがな)を弾いとる。」



### ヤクルト空容器を使って音を出す。

- A・Kくん「カエルの鳴き声みたいだよ。」
- まだヤクルトが入っている容器を手で押して音を出す。
- 担任も耳を澄まして聴いてみる。
- 担任「あっ、そう聴こえるね。」
- A・Kくん 何度も容器を押して音を出す。



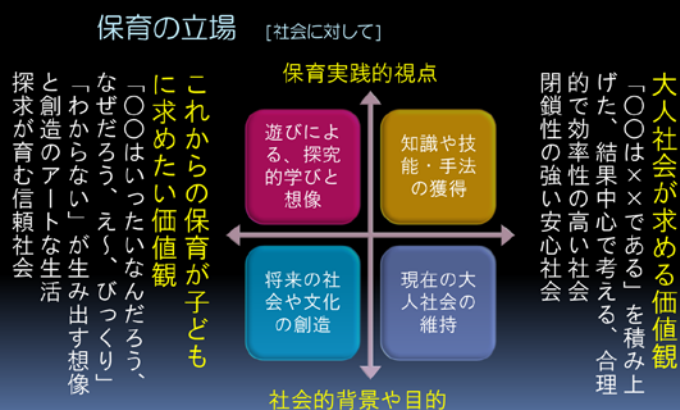
- 音を意識して、音に親しむと、音を使って遊ぶ方法がたくさんあることに気が付いた。
- 他の音遊びについても調べていきたい。



### 振り返り（園長）

- 子どもは、即興演奏そのものにどのような価値があるのかなど、意識しているわけではない
- しかし、活動でも見られたように「感じたものを音で表現することも面白い」ということは伝わったと思う
- 今回の活動を通じて、画用紙に五線を引き、そこに音を描くという絵画表現とそれを楽譜として演奏することによって、音表現と絵画表現とを結びつけることができたのではないだろうか

- 活動の中で文脈を持ちながら即興的に音表現することは可能であり、アイデア次第で様々な活動の中に持ち込むことも可能だと感じた
- 今回の活動を通して、「赤ちゃんのように表現できたら」という数年来の保育テーマに対し、今後の保育に応用可能な「創造的な方法」が生まれたことを感じている
- 今後は子ども同士の関係性の中で即興表現を発展させたい



## 実践発表 2

### 「生活の中にみる子どもの心と表現」

裕学園 谷戸幼稚園園長 伊藤 裕子 先生

今から 12 年ぐらい前から保育の見直しをしてきました。その中で子ども達の生活がすごく変わってきたということをお話したいと思います。

それまではいわゆるカリキュラムがちがちの幼稚園。そこからもっと子どもたちが主体的にいきいきと生活できるようにということとでいろいろ思考錯誤を重ねながら 6 年前に園庭に土山（高さ 150cm）をつくりました。そこからいろいろ保育が変わり、生活への考え方、実際の生活が変わってきたということをお話したいと思います。当時、運動神経の良い子たちが年長には多かったのですが、遊びが投げやりになってしまっていて、もっと遊び込める環境が必要じゃないか、そんなところでいろんなやり方があったのかもしれないけど、とりあえず土山をつくったところから始まりました。

まずは「挑戦意欲」と思っつつくったんですけども、子どもたちが図らずも雨水でつるすべることから偶然始まった登る遊びから、本当にあまり関わりのない子たちが手をさしのべ引き上げられ、そして今度はひきあげる側にまわる、そんな姿がでてきて、何かいいなと思って、自然に人がつながる環境がすごくいいなと思います。

こういう場面がまた見たいなと思ったのですが、土山っていうのはどんどん削れていくので一昨年あたりもう一回、つくり直しました。そしたら子どもたちシャベルかんなんかもってきて、両手でカシッカシッカシッと、自分が一人で登っていくという姿が見られました。子どもたちも進化していくんだなと感じました。もちろん下りるのもスリルがある、こんな遊びもどんどん展開していったら夏から 9 月全般ぐらいまでこんな遊びをしています。子どもたちの目がすごくいいなって思いました。何ものかを見ている目、というか見るものを見ている目というものを感じて、こういう遊びっていいなって思っています。

写真の真ん中にいるのは男性保育者ですけども、周りはみんなお母さん達で全員じゃないですけどやりたい人達だけです。今の人達っていろんな言葉を重ねて保育を伝えようとするけれど、群れ遊ぶ素肌感覚って親の世代も知らないのだからこうやって体験することがなによりって思います。おかげさまでうちの幼稚園では自分の子どもが洋服を汚して帰ってきて喜ばない親はたぶんいないと思います。

ダイナミックな遊びだけでなく、おままごとの遊びが展開したりとか、これは何日もかけて固めたりしたものです。ほんとに自然環境は人間のためにつくられたものではない、多様さというかそれが子ども達の五感を刺激しているというのが実感できます。最初は土山から始まったのですが、そこで子どもたちが遊び込み、またそこに「じゃあこんな素材があるといいね」とか自然の素材をどんどん取り入れたり、道具が増えたり、そして意味みたいなものが出てくるとか、抽出されたりとか、どんどんまたそれが塗り変わっていくそんな遊びが展開しています。もちろん土山の遊びばかりではなく子どもたちが

心開いて開放的に遊び込めるようになってほしいんですけども、やっぱり最初からそういう環境ではなく、園内の色々なところには色々な環境があり、この写真は4月の最初の頃の絵の具のコーナーでスタンピングのスタンプを出したんですが、この他にも筆みたいなものを出しています。それは描くための筆ではなく、いま感触的なことに手を出すのが嫌な子達もとても多いのでなにかちょっとこうガイドとして筆をもったときに、なんかこう楽しんでいるうちに「あっ、ついちゃった」っていうところから心解き放していたり、あるいは水たまりの上にちょっとなにかこうお船みたいなものをふうって吹いているときに間接的に水とか泥とかを楽しんだりそんな場面も至る所であります。

この写真も絵の具で保護者の人たちと一緒に遊んでいます。そうするとすぐ手形とか「ほーらー」って子ども達絶対しますよね。身体に塗る子たちも。それで磯部先生のご本の中に「描画の一番最初はボディペンティング」という言葉が書いてあった気がするのですが、実際にこういう遊びをやって あっ自分を確認していくんだなってそういう感覚って皆様もやっていただけるとわかると思います。

今、自然環境をすごく保育の現場でも見直していつていると思いますが、では「芝生にしたから自然環境」っていうのは大きな間違いだし、川を流したからといって自然環境かというところではなくて、私が思うのは「応答性のある」というか、子どもたちが働きかけたモノに答えてくれる環境いわば未完の環境というか、きちんと大人の感覚で整えたところではないだろうと思っています。そういった中で子どもたちがじっくり色々なものと向かい合う、自然に向かい、モノに向かい、コトに向かい、そして自分自身と向かえる、こういうゆったりとした時間も保障していかないといけない。あとそれから「やっていいんだよ」という雰囲気もすごく大事で、泥んこになりたくない人達もちろんいるけれど、傍で「こんな遊びやっていいんだ」というそういう姿があることが大事だろうと思っています。また、色々な人達と関わりながら、集団っていうのは自分が勝ち抜くための集団ではなくて、この幼児期っていうのはやっぱり友達という心地よさをたくさん感じて人と共感し、人と対話的に暮らす楽しさをいっぱい味わって小学校にいつてほしいなと思っています。

1つこんなふう遊びが展開しているっていうのを事例として出したいと思います。先ほど感触的な遊びをたくさん話しましたが1学期最初から2学期にかけて泥んこ三昧な遊びが色々な所で展開しています。また、それが場の感覚として体に刻まれていくというか、後半は何かみんなで場を共有しながら体を動かしているというのがここ数年あります。

この写真は一昨々年の実践で三クラスの年長児たちが関わったのが面白くもってきました。これは1クラス菊組さんが飼っている亀を散歩させようということで土山にあるそばに離れたんですね。そしたらほんとにどっかにいつちゃって、子ども達は必死で探し、じゃあ逃げないように池をつくろうということでこんな水たまりみたいな池もあったんで

すけども、柵をつくりだしました。でも亀ってすごくてどんどん板重ねているのに亀はどんどん登って行っちゃうので子どもたちは諦めてこれはもう放置したままこの場所でランチと言う感じになったんです。でも子どもたちはこの時の皆で何か一緒に「トンテンカンテンするのが楽しいね」という感覚はすごくあったみたいです。10月中旬ぐらいにその後ろにあるアスレチックで秘密基地ごっこが始まりました。この時期だと一学期から色々な素材の体験をしてくるので「ここに布の使いたい」とか保育者も「こんなものがあると子どもたちのイメージが実現できるかな」という素材を用意しています。秘密基地ごっこがはじまり、秘密基地といいながら外から丸見えなんですけど、中は時計があり、これは電気です。テレビとかこれはリモコンですね。こっちは電話なんですけど、担任はここで遊んでいる子どもたちともう一つ注文オーダーしている子どもを両方みたいということで、電話でここでレストランをしている子ども達に「もしもし」とか電話をかけながら二つの子どもたちを見ていました。担任から電話をもらったのでここでデリバリーのレストランになっていったんですけど、さっきの土山がどんどん削られていって私たちは「土山、土山」と呼んでたんでたんたけど、ここにできたレストラン、「丘の上のレストラン」と書いてて、子どもたちには「丘だったんだ・・・」っていうちょっとショックみたいな感じがありました。ここはね、電話デリバリー専門のレストランでおもちの専門店です。一応、イチゴ味のおもちとかチョコ味のおもちとかそんなお店になっています。

まあこういうクラスがあり、この写真はまた別のクラスなんですけど、10月後半に多摩動物公園に遠足にいったら、翌日動物をつくったりっていう姿があるかなって思って担任がちょっと材料だしといたら、やっぱりこうやってつくる子達ができました。なんとなくやりとりの中でこの枠は夏休みにつくってきた子がいてそれをとっておいたのを保育者がさっと出したらしいのですが、なんか小さい四角い紙を“びっ”て動物さんの口元に貼ったんですね。そこから「コンコン」とってお医者さんのやりとりが始まり、これが動物のお医者さんの薬局なんですけど、チーターの熱が90930度とか。ただ担任は子ども達は皆遊びに乗ってくるんだけど、ずっと部屋にいるのが気になって、じゃあ外でやろうよって外に呼びかけて外で動物病院が始まりました。「サクラレスキュー動物病院」という命名がされてたみたいなんですけど、最近のお医者さんは皆パソコン使うんですね。人間のお医者さんになったのかなって思っていたらやっぱりカルテには「チーター」と書いていて、住所：山の途中とか書いていてやっぱり動物なんだって思いました。これは看護婦さんです。また別の遊びから合流していったんですけど本当に錬金術師のように黒土・赤土、山砂色々混ぜて薬をつくっていったら、それで薬局にきた患者さんに、「玉ですか、粉ですか」という会話していました。これは救急室隊員なんですけども、わりとごっこ系があまり好きじゃない、造形系好きなくせに恥ずかしくて入れない男の子グループで、担任は、「おいでよー」と呼びかけではなく、「レスキュー隊員お願いします」という乗せ方で見事に乗ってきた子どもたちで、こうやって遊びをしていると「けがしませんか」とその下でずっと待っています。これはうちの運転手さんがお店屋さんのやりとりするかなってつくってくれ

たんですけど、ごっこ系が照れくさい男子たちの救急隊員の詰所になっているところです。これは病院のカレンダーで近くの医院と全く同じなんですね。偶然かどうか分からないですけど。

これは全然違う日に川掘って遊んでいたんですね。川を掘って遊んでいたんだけど、それが場の一体感を生んでいきました。土山のレストランとうしろの秘密基地と左側お医者さんと動物病院が合わさって、クラスをまたいだ交流が出てきたんです。もう1クラスは何をしていたかという、やっぱり自分たちもレストランやりたいって言って、まずは机と椅子だとして作り出したのですが、材料が子どもの手に負えなくてなかなか机と椅子が出来ませんでした。でも、ほかの子達はそれぞれに色々な遊びをしていたのでバラバラしていても一生懸命皆遊んでるからいいんじゃない、って様子を見ていました。これは担任の知らないところで3歳児連れてきて、3歳児と年長の兄弟が何人かいるので自分たちのクラスに3歳児連れてきて人形劇を無理矢理見せているそんな状況です。でも机と椅子がなかなかできないから「レストランやりたいって気持ちが沈んじゃうよね」って「じゃあ保育室から机と椅子だそうよ」と言って出した途端にごっこ遊びがはまってきて、さっきの人形劇の子ども達が外にでてきて、ここは「人形劇の見れるレストラン」になってきました。これは病院の人達なんですね。病院の人達は患者さんがだんだん人が少なくなって暇になってきて、担任はどうやってこの遊びを支えようかってオロオロしてたんですけども、そしたら病院の人達は「じゃあランチ行きます」って皆でレストランに来たところです。なんでそんなこと知ってるんだろうって本当にびっくりしてしまいます。救急車の人達も救急車に乗ってレストランにやってきました。レストランの厨房にはちゃんとメニューがあって、これはオフの日の非番のときの看護婦さんたちです。これがまた12月になって、冬休み明けにはまた違ったお店やさんごっこになりました。このごっこっていうのが幼児期には特徴的な遊びだと思うんですけど、社会の真似事をしつつ、自分の内側に自分にはないものを入れ込んでいくというか、こんなことなんだろうなって思ってます。

これはホテルのロビーで、この人たちはテレビの人たちなんですけど、テレビのお料理番組をしてピッてリモコンで変えとお笑い番組に変わるという、こんなことしてます。これはよつばホテルで、色々な何者かになるっていう遊びはあちこちでしてますよね。子どもから出た遊びをどのように保障していくのかっていうのが、やはりどう支えていけばいいのかというのは本当にいつもいつも悩みで、悩みというか色々頭をひねりながらも子どもたちとこうやって一緒に遊んでいくのは楽しい。

そんな生活の中でも、色々な仕事はあって、動物の世話をし、飼育以外の生き物にもいろいろ触れ、あと麦を育て、米を育て、野菜を育て、草取りした草を干しているところです。場をつくりそんな仕事をしつつ、心動かして描くそんな生活をしています。描いたりつくったりということが特別なことではなくて、こういう日常の中で本当に自然に子どもの内側から欲してくるものなんだろうなと実感しています。やっぱりこういう生活になってくると本当に子どもたちの色々な行為っていうのは本当に一つ一つ意味があるんだっ

て実感します。何気ないこともよく考えると子どもたちは色々なことを考えていると思います。これだからこの人こうしたいんだなっていうのが見えますけれど、こんなふうに整然ときれいにものをならべるっていうことは何も大人が教えるものではなくて、人間の内側にこういう美意識というものはあるだろう、こういうことを私たち保育者もきちんと保障できる、そういう環境の中で安心して自分を発揮して遊べるっていうことが出てくるんだろうと思います。



「生活の中に見る子どもの心と表現」

谷戸幼稚園 伊藤裕子

＜土山を築いた園庭環境から＞

- \* 応答性のある環境を目指して
- \* 感触的な遊びをベースに
- \* 自分たちの生活の場を作る
- \* 自然の恵みを受けて
- \* ごっこ遊びを楽しむ

＜応答性のある環境を目指して  
～感触的な遊びをベースに＞





全身を使って遊びに没頭する



助けられたり、助けたり。自然に友だちと繋がる。



土山を築いてから、遊びや生活が変化していった。



＜自分たちの生活の場を作る  
～自然の恵みを受けて＞



草取りや、畑作り、土作り。作業もいっぱい。



自分たちの畑の場所を決めよう。柵もつけようね。



育ててみたい野菜の他に、  
稲や麦は年長の仕事。



うさぎやモルモットの飼育の他に、  
いろんな虫や生き物にも出会う毎日



そんな生活の中に、描くこと  
も日常としてある。





描きたい気持ちが湧いてきたきが、描きどき。

### <ごっこ遊びを楽しむ>



感触を存分に楽しみながら、場の感覚を身体に刻んだ夏が過ぎ、5歳児たちは、互いのイメージを重ね、遊びを深めていく。



＜5歳児の事例＞ごっこの展開



飼っていたカメ「かるちゃん」を散歩させ、  
行方不明になったのをきっかけに



かるちゃんが逃げないように、池を作った。



みんなで作る楽しさを経験し、秘密基地づくりへ

生秘密基地の中には、  
テレビ、電話、ライト、時計  
リモコン、トイレ、お風呂  
などが作られる。



一方、クラスの女の子達は土山でレストラン作り。  
お餅を売るお店になった。



担任が秘密基地から電話したことがきっかけで、  
デリバリー専門のお店になった。



他のクラスでは、動物園への遠足の翌日、動物を作って遊ぶ姿が見られた。ちょっとしたきっかけで



動物のお医者さんごっこになり、園庭で実際に自分達が演じて遊ぶように発展した。



看護師さんは、黒土、赤土、山砂をブレンドして、粉薬作り。



薬局の受付。「こなですか？ たまですか？」



ごっこが照れくさい子たちも、「救急隊出動願います」  
の声掛けに、思わず反応していた。



けがしないかなあ、と待っている救急車たち



川を作って遊ぶ、病院ごっこの子ども達



川が伸びて、レストランや秘密基地や、病院、救急隊の詰め所など、園庭一体が町のように繋がる。



もうひとクラスの子も、レストランを作ろうと、大工仕事を始める。



部屋の遊びも繋がって、レストランが開店した。

土と草花で、レストランのご馳走が次々と生まれる。



「レストランに行きましょう！」と、非番の看護師さん

### 実践発表 3.

#### 「子どもの造形表現にみる心の作用」

横浜 インターナショナル スクール Early Learning Center Director

カンチェーミ ジュンコ 先生

私は日本人ですが、そんなには日本語が得意ではありませんので、この課題をいただいたときは、何回も何回も読みましてどういう意味で、どういう風にプレゼンテーションしたらよいか考えました。「みる」（という言葉）から、大人がみるということを理解したので、大人が子どもたちの作品をみて、心の作用を考えるとすれば、子どもの心に真剣に向かい合うためにはこの3つのことを考えました。1番目は、子ども、保護者、学校の教育のトライアッドが大事だと思いました。2番目は、子どもたちをよく知る必要がある。3番目は、遊びまたは会話の中の重要なコネクション、この3つにしばってみました。私たちの横浜インターナショナルスクールは、1924年に設立されて、幼児部から高校までつながっている学校です。650人全生徒、49カ国からきています。

私たちの Early Learning Center は、場所は離れた所にあるのですが、高校生もよくついています。前（の発表のように）、子どものどろんこの山もつくりたいのですが、それは本当に不可能なことで、ここは車も入ってくるので、いろんなことの制限もあります。ですが、とてもめぐまれた環境の中で、環境づくりをしたいと思っています。なので、私たちの園では、今年は少なめの20名の子が、20名でも、14カ国から子どもたちが集まっています。この課題をいただいた時に、私たちの学校のコンテキストを考えまして、やはりはじめて外国から子どもたちがきて、日本にもはじめて・・・、それで、私たちはすべて英語で授業を行っていますけれども、英語が母国語でもありませんので、アートというものの表現の仕方を大事にしています。それでまわりの環境をちょっと紹介したいと思います。地域の環境として「三溪園」、日本庭園なんです。どうしてこのようなことをいうかという、私たちの子どもはこういうところを離れて、どこことなく、こういう環境にふれて自分たちの作品にもつながることがあると思うんです。あとは横浜ですので、学校のすぐそばにはこういう風景があります。英国からの影響がすごくありまして、昔の英国の人たちが住んでいたお家がカフェになっていますし、私たちの園の裏には港の見える丘公園もあります。子どもたちは、こういったところも歩いたり遊びにいたりよくしている場所です。あとは、横浜ですのでランドマークタワー、ベイブリッジ、「横浜ブリッジ」と子どもはよんでいますし、チャイナタウンもあります。なので、こういった場所は、子どもたちと父兄、お父さん、海外からおばあちゃんがよく遊びにきたりすると、（子どもたちは）必ずこういう場所を訪れて、学校でも、ブロック遊びをしてる時や何か高いものを建てる場合は、よく「これはランドマークタワーだ」とか、よくお話にできます。これは私たちの園の中の風景なのですが、アトリエというお部屋もあります。このお部屋は、よく素材をおいて子どもたちが研究、いろいろな発想をつくりあげる場でもあるし、

または、小さなグループをつくって先生が考えた課題で取り組むこともあります。アトリエと考えると、子どもたちに与える素材、モールやガラス石などをすごくよく考えます。先ほどの泥んこというのも、粘土の原点だと思うので、本当に素敵で、一応、私たちも泥で遊ぶ場所はあるけれど、あんな大胆なことは、みて「素敵！！」と思っていたのですが……。色を先生たちが子どもたちに出す時に、子どもたちはキレイ、美というものは意識とかというものを持っていると思うし、やはり先生たちもこういうことを自分たちがこういうものを大事にしているっていうことを子どもたちと一緒に考えをつくっていきたいと思って、出すもの出すものすごく考えて子どもたちに与えています。で、すごくやはり、子どもたちの生活ってだんだん豊かになって、あの、レッジョなんかでもいきますとすごくいろんな素材があって、ちょっと圧倒されちゃうこともあるので、私たちは今年すごく考えまして、すごく少なく出しましょうと、少ない中で子どもたちはどのように大事につかってつくりあげていくのかっていうことを大事にしました。あとは、せっかく日本にいますので、インターナショナル スクールですけど、やはり、「日本の文化」っていう、「ここは、日本！」という環境もつくりたいと思いまして、これは子どもたちは、「ジャパニーズ・アトリエ」、日本のアトリエってよんでいますけれども、畳をしいて、障子をつくって、低いちゃぶ台みたいなものも置いて、日本の折り紙とか、生け花とか、書道とか、そういうものも子どもたちと体験しています。あとは、これはクラス・ルームのアトリエの一部ですが、いろんなクラス・ルームにもいろんな先生たちはどのように並べて、考えて子どもたちに出しています。で、やはり、これはライト・アトリエということで、先ほどアトリエという部屋がありましたけれども、アトリエと考えて1つの部屋だけではなくて、園全体がアトリエと私たちは考えたいと思いますので、ここには日本でいう広場でしょうか、そこにライトのアトリエをつくって、子どもたちがライトの研究にとりこんでいます。やはり、レッジョのマラグッツィ先生がえがいていたものっていうのは、子どもはたえず手を・・、手に何かをふれて、絶えず色んな五感を使って、いろんな体験をして、経験をして、経験をして、そこからものづくりがはじまるという・・。絶えず言葉でもつくっていますけれども、ものでもつくっていますし、先ほどの音楽でもありますように、絶えずいろんなものを子どもたちはつくっていますね。英語でいうとクリエイターというのでしょうか？子どもたちは、みんなクリエイターだと思います。クリエイトしているというということですね。これは、大きなブロックをつかってうしろにライトで映像で照らしているのですが、子どもたちの中ではこれはランドマークタワーではないですけども。自分たちのいろいろな経験の中でストーリーをつくり出しています。うしろには、いろんな映像を流すんですけども、これはうしろはちょっと川が流れている映像を与えて、本の読んだ中の物語とか、そういうことに連携して、ストーリーをつくりあげています。ま、これは、タイミング、子どもたちのお食事をする場なんですけど、ダイニングもアトリエと考えて、やはりいろいろなお料理をつくったり、いろいろなお料理をつくったり、いろいろなお料理をつくっている時にいろんな匂いも出てくるし先ほどの五感という感じではすごく、経験

できる場所です。父兄も一緒に、今年は、つくっていただいてあの一年はいろいろと楽しく、食べるのが楽しくています。お料理ってやっぱり科学的なものがあるので、サイエンスっていう意味では、これをたして、これをたして、これをたせば、何かが食べられるって、とても楽しいことだと思います。一応、小さな土のところにも野菜を植えたりして、育った野菜をつかってお料理したりしています。なので、外のこういう育つところも外のアトリエという風に考えてもいいのではないのでしょうか。アトリエというのは、子どもたちが研究できる場所だと思うので、必ずしも部屋一つだと限らなくてもいいのではないかという考えです。あと、はやり、テラスにいろいろなものをおいて、子どもたちがいろいろな作品をつくりますね。たまたま、この下に、輪っかがあって、ブロックの四角の（タイルの）枠があって、子どもたちはつくる時にはこういった枠をつかっているということですね。で、子どもたちがつくった作品も必ず中だけで展示しなくて、外に展示して子どもたちが小さなものを木の間に入れたりして発見したりして、迷路みたいな感じで中のも外に持って行って、外のものの中にもってくるという感覚です。

なので、先ほどの3つの課題に戻りますけれど、子ども、保護者、学校との教育トライアドというものがとても大事だと思います。写真を見るとこの4人の父兄はみんな違う国から来ています。一人はイギリス、オーストラリア、アメリカ、台湾です。パワーポイントに Values と書いてありますけれども、子どもたちの最初の先生というのは親です。私の園にくるまでの3歳になるまでに受けた教育というのは家庭から始まっていますので、いろんな国からきて集まっている園で、日本語でいうと価値観というのでしょうか？を確かめて見直すということがとても大切と考えて、こういうミーティングを開きます。これは私たちの新学期は8月なので、8月、9月の初めごろにこういうミーティングを行い、やはり私たち先生の学校の価値観も父兄に知らせて、父兄も自分たちが思っている大事なことも私たちに伝えていただいて、そこからいろいろつくり上げていっているという取り組みをしています。なので、子どもの心を知るっていうことは、やはり価値観というものがとても大事であって、どういう所から価値観が生まれる、どういう経験をしているのだろうということを再確認するために、子ども、保護者、学校との教育トライアドはとても大事なのではないかと思います。本当に、子どもたちをよく知る必要性がありますね。イギリスでは2年間ここですごしますけれども、インターナショナル スクールでは1か月で、また、どこかの国に転勤する方もいますし、長くて2年ですか？一緒にいられるということは。なので、数か月でまた、どっかにいっちゃうということもあるので、本当に一緒にいる時間はなお、大切に、その間に子どもたちを知るということは大切に思っています。子どもをよく知る必要性は、日ごろの観察からそのヒントをえられます。これは、一人の女の子がいろいろ絵の具を使って表現しているのですが、いつも必ず、これはママにプレゼントという風なことをつくっています。で、よくみなさんご存じだと思いますけれども、子どもがこういう風な絵の具で描くときには、最終的には、これはママで、これはパパで、これがお家で、それで夜になりましたというみたいに、最後に黒く塗って、

最終的に何も知らないでみれば、この絵って何なんだろう？と思いますけど、そのやはり、日ごろの観察からよく子どものプロセスをすごくよくみていると、その子どもの一つのアートにしても、本当にいろんな物語、いろんなお話が含まれて隠されているってことです。遊び、会話からの重要なストーリーとコネクション、これは8月、新学期がはじまったころなんですけれども、ここにいる男の子たち全くお互いを知りません。こちらは4歳から5歳になる子どもたちなので、あのE2というクラスにいるのですけれども、ホワイトボードにいろいろな絵を描きだして、忍者タートルを描いているんですね。忍者タートルを描いて、そこで共通の話題ができて、その子どもたちのリレーションシップ、関係が深まっていくっていう、ホントに初期の段階でした。子どもたちは最初、すごい恥ずかしがったりして、どうやって近づこうとか、すごい考えると思うので、こういう風なアートを通しての子どもたちの関係で遊びの中、先ほどの泥遊び、音楽の発表がありましたけれども、すべて子どもたちの遊び、会話に耳を傾けることが大事だと思います。

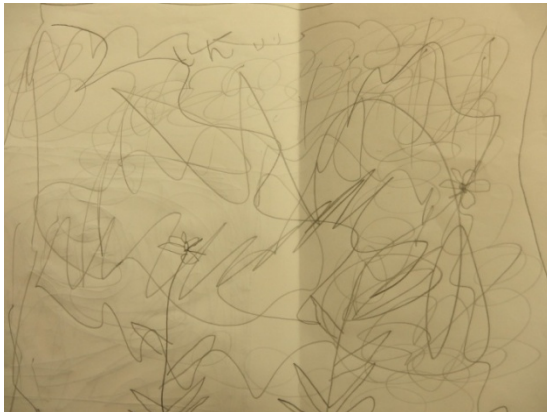
で、今年は子どもたちにノートブックを与えて、子どもたちに好きな絵を描いてもらっています。左はたろうくんの絵で、ジェッシーくんの絵なんですけど、二人ともこういったスーパーヒーロー、忍者タートルとか仮面ライダー、仮面ライダードライブとか、私もだいぶ覚えましたが、とてもこういったものが自分たちにとって大事なんですね。遊びに必ず自分たちもヒーローになりますし、絵にもそういうことができます。絵にもかかわらず、「何か敵がいて、自分たちは仲良しなんだ」みたいなようなストーリーができて、この子どもたちはまだ英語がしゃべれなくて、遊ぶときは日本語になってしまいます。そして、英語をしゃべる子どもたちと日本語をしゃべる子どもたちのグループができてしまって、英語をしゃべる子どもたちが敵みたいになってて・・・この遊びをよく今でも観察しているのですけれど、子どもたちの距離がどのように縮まっていくのかということが興味深いところですが、絵を描いてもらうと必ずやはり自分たちが思っていること、自分たちが遊んでいることを必ずこういう風に描いています、それで、表現をしていますね。子どものたろうくん、ジェッシーのストーリー、自分たちの心の中の表現というものがこういう絵で表れると私たちはみているのです。これは、ダニーのストーリーです。ダニーはイギリスの男の子、もちろん日本ははじめてで、必ず何かみんなと何か馴染めなくて、先生とばかり話すことは大好きです。これは粘土を与えたんですけど、で、両親たちとお相撲をみにいきて、このことがすごくきっかけで、「お相撲さんを僕はつくりたい」ということで、右がお相撲さんの作品なんですけれど、このお相撲さんのお話がきっかけで、もっと会話が広がりました。これを表現してきたことで他の子どもたちも集まってきましたし、ここからのダニーのストーリー、自分がつくった粘土で、ダニーのこの園の生活というのがすごくターニングポイントになった日になったとすごく私たちは感じているところです。ダニーは最初は粘土なんか何をつくっていいかわからなくて（いましたが）、お相撲さんつくって以来、いろんなものに取り組んで、粘土、英語でいうとクレイっていうんですか？土のかたまるとなようなもので工作しています。これがエリーのスト

エリーなんですけど、やはりインターナショナル スクールですので、いろんな国に旅をします。で、彼女のノートブックに「好きなものを描いていいのよ」といったら、これを描いてくれました。これをエリーに説明してと聞いたら、「これは自分が今年の夏に旅した絵だ」と。「自分がシンガポールに行って、ベイジン（北京）にいて、チベットにいて」というような表現の仕方です。彼女の心の中では、この旅でした経験がすごくやはり大事だったんだなということが・・(分かります)。これは親も一緒に見てもらったのですが、親もそういう風に感じていました。これはかいととアシュリーのストーリーなんですけど、かいとくんは日本生まれで日本で育っていて、日本語しかまだしゃべれないなんですけど、アシュリーはアメリカからきた女の子で、二人とも 3 歳児です。これはアトリエの中なんですけど、かいとくんは滑り台をつくっていて、かいとくんは滑り台をつくる中でいろんな話をしてくれます。アシュリーが、歩いてきてかいとくんのつくったものに手を触れなくて、尊重して、自分がそばにあった材料で自分も何かつくったものをつくり上げていきました。つくり上げたものを上からみるとこういう絵、クリエーションですが、かいとくんは自分で「滑り台」といいましたが、アシュリーは何も課題をいいませんでした。ただ、本当にかいとくとアシュリーはお互い言葉では通じませんでした。作品を通して、すごくお互いに近寄ったという心の中が見受けられるのではないかしら。それから、お互いを尊重して、他の子どもがつくった作品にまったく手を触れずに自分のそばでつくったということで、じつはかいとくんは二人、ダニーとクロリーがアトリエでこういうものをよくつくったものをみていたので、おそらくこれでインスピレーションをうけて自分も滑り台をつくったのだと思います。

子どもたちの造形表現「子どもたちの(造形表現の)美しさを禅のお庭に例えるならば・・」とちょっと考えてみたんですけども、禅のお庭を考えるならば、「簡素、不均等、自然、有限、静寂」っていうようなことがありますけど、子どもたちの作品の中で、子どもたちはそういう感覚、そういう心をもっていると思うのです。「簡素」は4～5人の子どもの作品ですが、私たちのお庭で、自分の好きな葉っぱを選んでみんなでさしていました。先生はここにさしなさいっていいはいいませんでしたし、子どもたちも自然な作りでした。「不均整」はオフ・バランスっていいのでしょうか？これは白い布の中にまた 5 人でつくったものなのですが、自然に一人ずつ順番においた葉っぱがこういった作品になりました。「自然」っていいことに関しては、これは一人の作品なんですけど、葉っぱで自分でいろいろ考えておいた作品です。「有限」って考えてみると、何か、どこか何かに秘密が潜んでいないのでしょうか？というような表現なんですけど、これは大人がみると、おそらくあれはいるかで、いるかの目と風に思っちゃうんですけど、実は子どもたちは下の葉っぱを一つずつおいていったんですね。これもまた4～5人で。好きな葉っぱを選んできて一人の子どもが一つ置いたら、次の子どもがそこに一つ置いて・・という風に並んでいったんですけども、そして、上にある葉っぱを最後の子どもが置いたんですけど、ま、実はこれは「いるかをみている」ってことで、でも座っているかをみているということなんではな

くて「円になっているところが座るところなんだ」と子どもたちはっていました。最後の「静寂」ですが、マティーナはお庭をみて描いたものでは、もちろんありませんが、マティーナはすごくいろんな線を自分で何か考えて、最初は線を描いていたんですけど、この時は点、点、点って描くことを発見して、作品を終えました。全部うめなくても「静寂」という表現は、子どもの表現というのは子どもの心の中にあるのではないかと思います。

#### 子どもの描画などの写真



a map



sumo wrestler



## 園生活における子どもの表現とアート：心理学者の視点から

東京大学大学院教育学研究科 秋田 喜代美 先生

実はこういうタイトルを頂戴して入ってるんですが、心理学者の視点からだけちょっと字を小さくしてあるのは、心理学から、例えば「どういうふうに発達するのか」というようなお話をさせていただくというのではなく、私が保育に出会って考えている姿をお話したいと思っております。今、お話を伺った3人のキーワードとポイントを私なりに拾ってみるとこのように整理できます。福田先生は、主体性を発揮するのに、どうしてもアートの分業になりがちである、なぞるだけから即興的な演奏、さらに子どもたちが本物の楽譜に出会い、音を今度は言葉で、文字で表現してみたり、逆に今度は音を聞いて色んなものをイメージしてみたり、さらにそのような意識があるからこそ、日頃気付かなかったおじさんとの出会いから様々なことが出てきて図形譜につながっていったり、という、音が音だけではなく多様な表現世界をつながるお話をしていただきました。

そして、伊藤先生が築山か土山でものをみる子どもの目であったり、素肌感覚の体験、まさに「身体」のところから表現が始まることを伝えていただきました。それを支えていく応答性のある環境、子どもは自分の内側にあるものを入れ込んでいくことによって新たな何者かになっていく。でもその環境の中で遊びを保障していくことで子どもの活動に意味が与えられ、時には「並べる」など美意識もみられるというお話をくださったと思います。

そしてカンチェーミ先生からは、多様な外国国籍の子どもだからこそ「アート」が非常に重要な意味をもっていて、特に多いものばかりの生活の中で、少ない中からどのように大事につくり上げるのか、インターナショナルスクールなので文化というものを「アートを支える文化」というものに目配せをしながらわたし達の力を見直したりプロセスを見取っていくこと、そして子どもの作品の中に必ず敵と仲間の物語が出たり、表現の中に人間関係がみえたりしていく。と同時に描かれた作品だけではなくて、その子ども同士が作品をどう取り扱いみるかということの中にも子ども同士の関係や相手を大切に思う姿がみえるというようにお話、そして大事にしたい様々な心の中の風景をお話をいただきました。そして様々な表現のスタイルというものがあるわけですが、これは槇先生が子どもの表現という時にも個人によって三つのスタイルがあることを書かれています。そういう意味での環境にかかわる志向性の強いものもあれば、自分の身体から表現をしていく、さらには他者とのごっこのようなものの中に表現をしていく、色々な表現が今日は三つの報告の中で現れてきていたと思っています。それは私は今日よんでいただきながら、美術とか図工だけをアートと捉えるのではなく、より幅広くそれぞれがおとりになったんじゃないかと思っています。私自身はアートというものが4つの気づきを乳幼児から大人まで与えてくれるのではないかというふうに勝手に自分で考えております。

一つは「Old is New」と書きましたが、表現そのものがもう一つの私、描いたり、作品

とか、作品だけではありませんが、関わったりしていつて没入していつている中で、今までとは違う自分とか新たなものに気づいていくという側面があります。それから第二に対象の認識ということで、例えば福田先生の例に顕著に現れている、毎日の生活の中ではあったはずだけど気が付かないことがある「音」とか、新たな側面から新たな感覚から予想を通して感じたり表現したりことによって対象の見方が変わっていくというような生成された表現とか、創っていく過程が表現の対象の新たな見方に変えていくことで気づいていくとか、もう一つの世界が発見できるところが、今日の御報告にもあったのかなと思います。三つ目としては、その表現の様式や素材や道具の新たな側面に、表現をしていくことで築いていくことが報告の中にもあったように思います。表現媒体も色々なものを使って表現をしていく、その基本にあるのは身体ですけど、そこからの色々な、「あ、こんなふうにも表現できるんだ」というようなことが出てきたりしますし、子どもたちなりにごっこならごっこの中で、新たな道具を使うことで「これはこういうふうに使えるんだ!」と気付いていつたりする。そして四つ目としては、新たな生活の価値っていうんですかね。そういうものを使うことによって、なくてもいいものかもしれないけどそれがあることによって、心地よい、美しい、楽しいとか、そういう価値というものを新たに、子どもたちに気づきとか感覚として育ててくれる、それが乳幼児のアートのもたらしめてくれる新たな意味なんじゃないか。表現した、例えば飾ったもの、つくり出したものが、自分が遊びのために、これつくろうってつくって遊ぶから更に面白くなる、というのはよくあるわけです。楽しさとか面白さとか美しさ豊かさといった価値が、他にも色々あると思います。使用してみることで価値がでてくるというような、新たなより高次の生活の質を子どもに保障していつたり、さっきのカンチェーミ先生の話にあった、新たな文化を生み出していつたりというような側面があるのかなと思います。それを心理学からと言われれば、なかなか難しいところですけども、そんな4点の可能性を感じています。その可能性に保育者自身が気づき、楽しむ時間や間がどういうふうにも子どもも保育者も、そして保護者も、価値付けられるのかが今問われているのではないかと思います。今日はお三人の報告を聞かせていただきました。

表現することは心に刻み込むこと、臨床心理学の Gendlin の言葉ですけども、表現されるのはごく一部ですけども、その奥に静寂であったり、沈黙・沈潜している、これはある意味心理学的な考え方で、その深層心理が全て表現に表わされているというのではないわけです。特に乳幼児の場合には言葉は持ちませんから、そこにもまた気付くというのが重要なことなんだろうと私自身は思います。多分子どもの表現をどう見るかというときに、さっきの今の図というのは子どもの心の中に深い沈潜があつて、そのある種の部分がこう現れているんだ、ということを表しているのとらえる見方だろうと思います。それもまた一部、心理学的ですけども、私自身は内面の表れだけではなく、まさにその生み出そうとしている表出し表現していく状況との対話の中で生まれてくる子どもの動きや活動そのものがアートなんじゃないかって思います。私自身は作品とか作品の裏にあるものと心と

表現を一体に捉えるだけじゃなく、そこで動いているまさに遊んでいるから仲間といつかその状況との中の対話としてアートを捉えていく。その時に大事なことはその子の感覚や素材との対話がどれくらい保障され、そこにある種、乳幼児なりのわざとか、ある種の側面の保育者側の支援があり、例えばこれつくりたいといってもその空き箱とトイレトペーパーの芯をどうやって三次元でくっつけるかは最初は子どもは難しいわけです。だから、そこにある種の気づきがでてきたり、表現しながらみたり、プランがでてきたり、そこにやはりこちら側の環境・他者・活動過程との関係の中でアートというものがとらえられる。心理学は前は個体を問題にしていたと思いますが、それだけではなく、環境状況との文化的な多様さ、社会文化的に構成されれば、こういう考え方が重要になってくるのだと思います。

この頃乳幼児期から保幼小の接続ということで学びが大事だと言われています。だが、私にとってアートとは無理・斑（ムラ）・無駄が多いものと大人がとらえるけど、だからこそ大事なことだと思っています。こんなの無理でしょうと思う私は、宇宙飛行士になるとかお相撲さんになるとかありえないけれど、それが遊びの世界で、アートの世界では無理ではなくなり、群がって遊びたい時もあれば斑（ムラ）をゆるし、ある種、時間的に見れば無駄かもしれないものこそが実はアートにおいて無意味ではないかもしれないけれども、常に意味にそう社会の生き方を問い直してくれるものになるのではないかと思います。

これは Vea Vecchi さんの言葉です。カンチエーミ先生が英語で表現されたスライドを日本語に訳したものです。身の回りのものに対する共感の態度とか、もう一つのものよりもっといいものを生活の中で、音が今聞いている音よりもモーツァルトのもっと綺麗な音を、とか子どもなりに、よりよい生活を求めていくということを求めたいわけです。もっと本物らしくつくりたい、つくったらもっといい感じがするとか、ケーキづくりでもこれではなくて、もう少しこのお菓子を本物らしくしたいという思いが、子どもの遊びの中の生活をより豊かにしていくんじゃないかと思います。そういう意味で、常にそこに関わっていくことが乳幼児期に美しい楽しい面白いという情動をともなったよさとか本物を希求していくことを培っていく。だから、何を習得したのかというよりは、そのプロセスの中にある意味を問うということが大事になるのかなと思います。あらゆる人が芸術家である、彼らの制作過程において遊びとか仕事において自分を表現するよりも、さらにより以上のことをだしつつある、これがもうひとつの私を生きるということになるのかなと思います。

レッジョのアトリエリスタだった伊藤史子さんの作品ですけれども、「あつ」と思ったんですね。この季節、色んな枯葉でプールのようにビニールプールにおもいきり枯葉を入れて遊ぶ園もあれば、それから買ってきたもので見立て遊びで「うさぎさんだね」とかやってる園もあれば、色んな園を私は見させていただくわけですが、これは大人が色々並べているわけですが、ここに美しさみたいな価値がそこにあるっていう、それによって新たな枯葉が生活を豊かにしてくれるようになったりするんじゃないかなって思います。

規則性が美しいと私たちは感じたりする。また、表現に抵抗を持っている子が素材とか道具との対話を通して表現したいものをかく。これは、宮前幼稚園の亀ヶ谷先生が四角い画用紙だけでなく、細長い紙もちょっと用意してみられた。そしたら、これは六月の実践でアリを見つけた子どもが、大きい画用紙にはアリは描きにくいんだけど、ちょっとした長いものでというご報告をくださいました。こういうふう子どもたちなりに出会ったアリを描き、それを掲示することによって園中をアリが歩いているようになるというような、またこういう表現が外のものを内へ、内のものを外へというような厚みをつくり出していくんじゃないかと思います。さっき、泥のお話をいただきましたけども、土の実践もまさにこうやってやっていく、それそのものが子どもの表現ですし、また一方でそこから泥絵の具を使って、今日は泥絵の具をつくりました。じゃあ描きましょう、という園と、十二分にこれだけ遊んだ上でそれがまた、表現の材になっていく園とでずいぶん違うんじゃないかと私自身は思うわけです。こういう生活＝継続性というものが子どもの表現やアートを支えているんじゃないかと思います。むしろ内面の声が生まれる前に妨げられてきているものがないかということを見る必要があるかもしれません。

これは、グレッツインゲルの『なぐり描きの発達過程』の中に、「これなあに？」と先生が聞く。子どもが表現したものを「何これ描いたの？」って言われるほど嫌なことではないと言っています。見りゃわかる。そこにはある種の評価の言葉が入ってるのかもしれないと思います。これは、ぶどうをつくった時に、子ども達が色をつくって、自分たちで調べてぶどうに色をつけるという、粘土でぶどうをつくっている姿でありました。この右側の女の子は一生懸命仲間のものを見ながら粘土の上に色をつけようとしているんですけども、まずは筆が面白かったり、色をつけるというのは目的ではありますが、だんだん必ず色をつけるより、下のぐちゃぐちゃになったのを楽しんで、だんだん嬉しそうな表情になっていたり、お互いどんどんまくって、上に色を塗るというよりも、なんかまみれているというか、そういうプロセスの中で子ども自身がまず素材や表現の用具、様々なものとの対話の中で浸りこんでやっていく、そのプロセスを面白がって、最後におそらく今日皆さんもおっしゃっていましたが出来上がった作品はこれなんですけど、これだけを見るとおそらくぶどうに色をつける課題そのものが見事かどうかはあると思いますが、そのプロセスにおいて子どもが経験していることの豊かさが様々に現れてきているのではないかな。そこを私達が見取る目ってというのは、実はそちら側の心理の提起はないんですね。子どもがいかに描くかっていう話はあるんですけど、保育者の側がどう見取っていく力量をつけ、そしてそれをどのように支えていく知識や技能がいるかっていうのがアートの心理の研究としては必要なんですけども、少なくともその領域が十二分に研究がされてないんじゃないかなと思っています。

こうしたものの中でも本当のいちごケーキではないけれども、子どもが思いきりいちごを食べてみたい、ケーキの様相でボコボコにいちごがついていたり、このお子さんはこれ注射器、この子入院していて長く園をお休みした子がそのあとつくった作品だそうです。

たまたまこれは一昨日私はある県にいて、たまたま園で作品展があって、そこで見た作品です。これ不思議な注射器のイメージだったんで先生にお話を聞くと、注射器一本のはずけどこの子にとったら本当に注射器が心理的にあらわれている。でも、この子はこうやってやっていくことで、園の中でまた仲間と関わっていくわけです。この子は亀が首を引っ込めている姿をいつもみているので、頭がなかったり、この子のが小さいんです。先生がおっしゃっていました。なんでアイロンなのかアイロンをつくろうと思ったのか、できたのがアイロンに見えたからアイロンにしているお子さんです。外のある造形教室に通い、そこで描き方を注意され、それ以来園で絵がかけなくなったり、のびのびと動けなくなった子の作品だというふうにあとでうかがいしました。やっぱり私たちが乳幼児が伸びやかに育つものを良かれと思うことが阻んでいるのは何なのかということを、もう一度生活の中で見てみることも大事なのかもしいと思います。まさにさっきカンチェーミ先生がおっしゃった距離が、手をつないでいたり、家庭との姿も当然あらわれますね。私、こういう和やかな家庭っていいなって思います。これは園日誌をずっと4、5歳で書いてお友達と話し合うのを毎日やっている園の実践ですが、「パパがお仕事から帰ってきた時、みんなでおかえりって言うてるよ。」ずいぶん優しい家庭じゃないですか。我が家だとありえない。でもそこに、園で描いてるわけだから、そこを見ているわけではないけれど、子どもの中にこうしたほんわかとしたものが見えてくる。そこに保育者もまたその絵から、子どもとのつながり、日常の経験を知ることができるのではないかと思います。

じゃあ「アート」は何を生み出すのか、OECDもアートと教育というような成果に注目して昨年報告書を出しています。『Art for Art's Sake』“アートはアートのためだけなの？ なんのためにアートは大切なのか？” ちょっと簡単に申し上げると、世界的にみますと、この10年でこれは小中学校のデータです。学校でのアートに関わる教育、アートというのは図工だけではなくありません。音楽とか劇とか様々なもののトータルの時間が世界各国減っている。という、アートの重要性というものが、必ずしも世界的に時数が減ってきていて、日本の場合は真ん中あたりなんですけども、白いところを見ていただくと、一応、心理学者なんでね・・・データなんか出さなければいけないと思って・・・、ここが2001年、こっちが2010年で時数が全体として国際的に減ってきている。私達は乳幼児になぜこれが大事か考える必要がある。アートの調査研究です。530ほど世界各国で行われているアートが何を育てているかという研究をレビューしたものです。アートの多様な教育を受けている生徒の方が教科の成績が高いというような、少ししか選択していない生徒より高い傾向があるそうです。しかしそれは学校の方針とか、そういう学校に通っていること自体がある種の価値観を選んでいいのかもしい。アートは他の教科や能力には転移しない。創造力を育てるというけど、創造力を計るテストというのは色々あるわけですが、そのテスト結果で見る限りアートをよくやっている子は創造力が高いという関係は全く見られないというのが報告書で出ていました。そこに書いてあるのは、創造力テストという測定自体に問題があるのかもしれないし、創造力というのは幅広く考えているから関係がないのかも

しれないし、おそらくこの中でアートはアート固有の心の習慣っていうのを生み出している。ものに対峙するときのある種の habit of mind を生み出しているのだけれども、それが何とつながって何を育てているかは実はアートの人も明確には語ってくれないので、よくわからないということが OECD の報告書には書かれています。

ただし、職業教育にはなっている。実はアーティストというのはどの国も結構な割合でいる。アーティストの教育としては職業教育としてなっているのではないかということが小学校以上の部分で書かれています。その時に私達は乳幼児期にこそ、その時数が少ない多いではなく、総合的な活動としてのアートの中で考えなければいけないことは何なのかとらえる必要があると思います。

最後のポイントですが、アートを指導するアートという、OMEF の元代表のスウェーデンのサミュエルソン達が書いています。アートというものを「こういう活動やった」って活動主義とか内容主義じゃなく、アートを長い目で見たときに何が重要な特徴なのかということを保育者が知っている必要があるのではないかということでもあります。それは例えば、ダンスというのを「ある踊りをしましょう」とみんなで踊る時に、例えばプルとプッシュと英語になっていましたが、押す引くとか、静と動とか、緩急とか、強弱とか、動きの大きさとかそういうことを子どもに言語的な説明をする必要はまったくないんだけど、色んな動きをしてみながら、子どもは実感できるようにするっていうことはとても大事なことなのではないか。

それから例えば、詩というものでも子どもたちに歌と歌詞という時にも韻律であったり、比喻とか言葉で説明はしないけどそれを実感させたり、口ずさみながら感じるということ意識するのか、「今日はこの歌歌いますよ」、とか「この歌ですよ」と言って終わりにするのか、そこは先生のセンスが問われてくるのではないか。英語では **critical feature** というふうにいってますが、識別とかバリエーション、タイプ分けに気付いていく。それが実はアートを指導する時の一つの乳児期、幼児期の 2~8 歳と書かれていましたがアートの技ではないかという議論が出されています。

子ども自身がそうした要素を、福田先生の実践の音を言葉で表す、絵で表現するということが重要な特徴であるのかもしれませんが。例えば線というものをこれは亀ヶ谷先生の絵ですが、引く、それも色んな引き方をしてみることで線を線というものに何かを描くということに、これはあとでみて草っぱらに見えてくるんですけども、全員が引いたあとだと。子どもたちは後で何かに見立てるわけですが、これも白い画用紙の真ん中を開けることによって、子どもたちが違うものに日頃の画用紙と違うものをみたてていくところ、これは伊藤さんが新都美術館でやられているアトリエのワークショップの中ですけども、色んな線を引いてみると次の子が色々順に引いていく。もし、それぞれの性格や性質どんな線に見えるか、というようなことを子どもたちが考え、線が何に見えるか、色がどんな色に感じられるか、これも端切れをもらってきて並べられたという実践ですが、こうやって並べてみることで灰色という一色ではない色を子どもに経験していくような身近な生活の中か

ら感じ取っていくことが、色もそうですが、大切かもしれません。カンチェーミ先生が文化ということを言われていますが、これは中国に行った時に長州の幼稚園で撮ったものですけど、なんとなくそう言われてみるとそんな感じしません？やはりそこに私たちが文化的なものを大切にしながら表現していく。単なる紙皿とかこういうものの中に、大事にしている価値みたいなものが共有されていくのではないかと思います。これもアートというものを活動や実践としてみる。おいもほりに行った園が今までは単においも掘りの絵を描いておりました。去年見た時には、おいもの大きな絵本を読んでいて、なんで絵本なんか読むんだろうと実際やってきたのにと感じていたんですけど、必ず絵本を読まないといけないと思ってる先生がいてですね、そうじゃなくて、今年は全部、子どもたちが洗ったり仕分けを全部自分たちで戸外でやりまして、そのあとに絵をかいたら色々なおいもの絵がかかれて、先生は去年に比べたらずいぶん違うっておっしゃってました。そのあとに料理をしたんですね。そしたら、この絵は先生たちが掲示をつくっています。そしたら、子どもの方が親に伝えないといけないから「自分たちも掲示をつくる」と言って、これは今度は保護者にむけて先生がつくるんじゃなくて、子どもの方が伝えておかないといけないことを先生をいれてつくっている掲示であります。

最初に出した絵と同じものをちょっとだけ変えておきました。子どもと保育者の表現の響き合いによってアートがつくられると思います。そこでは子どもの声を聞く、創造性神話ということで、私には創造のセンスがないからとかアートの才能がないからという才能説ではなく、状況に応じて引き出していく、そのためには即興的な先生の対応が、作品主義を超えて、表出・表現をともに継続的に作り出していくものとしてみるということが重要になってくるでしょう。そのためには素材や道具というものを保育者自身が探究し、そこで何が重要なのかということを子どもに意図的に教えるということがなかったとしても、先生が背景に深い、こうした知識を持っているということが重要なのではないかと思います。保育者側にこれから何が求められるのかということが表現（アート）の発達心理学研究として重要なのではないかと考えております。ちょっと早口で申し訳ありませんけれども、これで終わりにさせていただきます。ご静聴有難うございます。

## 園生活における 子どもの表現とアート:心理学者の視点から

秋田喜代美  
(東京大学教育学研究科)

|                 | キーワード                                                                                                                                                                             | プロジェクト<br>物語る展開                                     |
|-----------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------|
| 福田<br>先生        | 主体性 音を出す楽しみ(分業)<br>なぞり 即興演奏、本物の楽譜との出会い、<br>音の文字表現、音からイメージ、汽車、おじさ<br>んとの新たな出会い、意識、図形譜<br>聴こえてくる音を描く お話に音楽をつける                                                                      | 今日の天気はどん<br>な音?トカゲの好き<br>な音は?モーツア<br>ルト             |
| 伊藤<br>先生        | 観る物を見る目 素肌感覚の体験 解放<br>ボディペインティングで自分を表していく<br>応答性のある環境、恥ずかしくては入れない子<br>自分の内側に自分にはないものをいれこんでいく<br>何者かになること、子どもから出た遊びの保障<br>行為の意味、並べる美意識                                             | 土山 泥んこ<br>丘の山のレストラン、<br>病院、レスキュー隊<br>ごっこ、料理番組<br>自然 |
| カン<br>チェミ<br>先生 | 重要なストーリーとのコネクション、多様な外国籍、<br>色(美意識)、少ない中からどのように大事に創る<br>か、日本文化、園全体がアトリエ、手、五感、映像、<br>中外の交流、価値観の見直し、プロセスを観る<br>共通の話題から関係が深まる 恥ずかしさ、スー<br>パーヒロイン、敵と仲間の物語 作品の尊重と距<br>離、簡素、不均性、自然、有限、静寂 | 子ども保護者学校と<br>のトライアド、料理<br>それぞれの子のス<br>トーリー          |

## 表現への個人のスタイル (槇;2004、佐川、印刷中)

|          | ものタイプ    | 感覚タイプ             | 状況タイプ        |
|----------|----------|-------------------|--------------|
| かかわりの志向性 | もの(環境)   | 自己(身体)            | ひと(仲間)       |
| 作ろうとするもの | 形(もの)    | 自己イメージ            | 関係性(状況)      |
| 優位な感覚・表象 | 視覚・映像的表象 | 身体、触覚、音・<br>動作的表象 | 言語・象徴的表<br>象 |
| 遊びの好み    | 製作・構成    | 感覚・運動・リズム・遊具      | ごっこ・ゲーム      |
| 場・活動の嗜好  | 創造       | 安定・表出・探<br>索・参加   | 想像           |

## アートがもたらす気づき

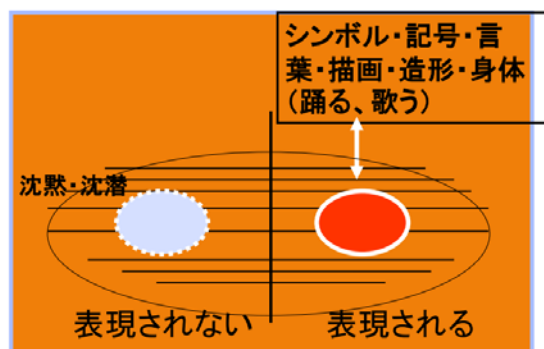


## “Old is New” アートの魅力

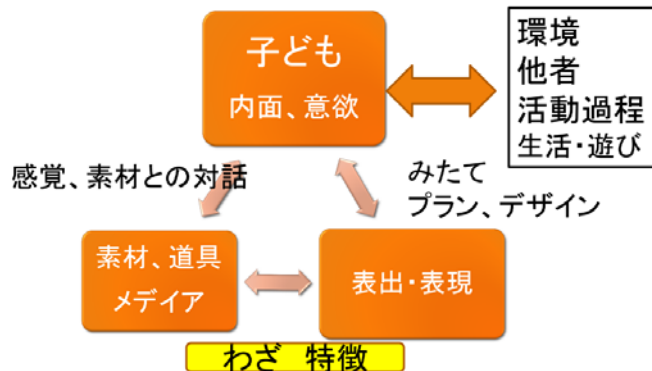
- ①表現そのものがもう一つの私、私たちの発見 没入
- ②生成された表現や構成の過程が表現対象の新たな見方に気づかせてくれる もう一つの世界の発見
- ③新たなわざ、表現媒体、道具の可能性の発見
- ④表現した物が、楽しさ、おもしろさ、美しさ、豊かさ、という価値を生み出す  
使用、鑑賞の価値 新たな質の生活、文化の発見

その可能性に保育者が気づき楽しむ時間や場の保障が行われる

## 表現することは心に刻み込むこと (Gendlin)



内面の表れのみでなく、状況との対話の中で生まれる子どもの活動としてのアート



## 乳幼児期にこそ培いたいもの

学びだけでいいの？ くらしや遊びの中で生じていること  
むり、むら、むだ

- ・ 審美性 美しさへの感性、情動 よさ、本物への希求
- ・ 私たちの身の回りのものに対する共感の態度、質の向上への志、もうひとつのモノよりもよりよいもの、他の一編の音楽よりもよいひとつの音楽へ、他の食事よりもよりよい食事へという選択をしていくもの無関心や体制順応の対極として定義され、参加や関与の欠如の対局にあるものとして定義される Vecchi, 2010

あらゆる人が一種の芸術家である。  
そして彼の制作過程において、遊戯  
あるいは仕事において、自身を表現  
するよりもさらにより以上のことをなし  
つつあるのである。

(ハーバード・リード

「芸術による教育」浅羽 2014)

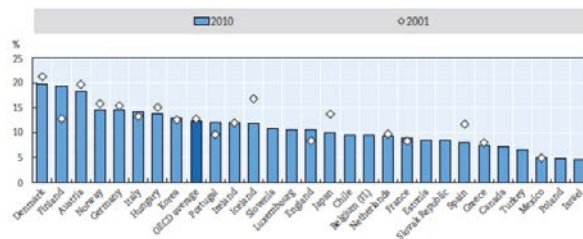
## アートは何を生み出す？(OECD、2013)

- ◆アートの多様な教育を受けている生徒の方が教科の成績も高い。しかしながらその道筋は定かではない。
- ◆アートは他の教科や能力には転移しない。
- 創造性テストで図られる創造力とは関係がない。
- ◆おそらくアート固有の心の習慣(habit of mind)を生み出しているが、それが何とつながり何を育てるのは明らかではない。
- ◆しかし職業教育にはつながっている。多様なアーティストの育成



## 世界的にこの10年で学校でのアート教育の時間は減ってきている

Figure 2. Instruction time of arts subjects as a percentage of total compulsory instruction time for 9-11 year-olds (2001-2009)



Source: Note: Countries are ranked in descending order of 2010 instruction time of arts subject as a percentage of total compulsory instruction time. The OECD average presented is based on countries for which information is available in 2001 and 2010.  
Source: OECD (Education at a Glance 2003, 2012).

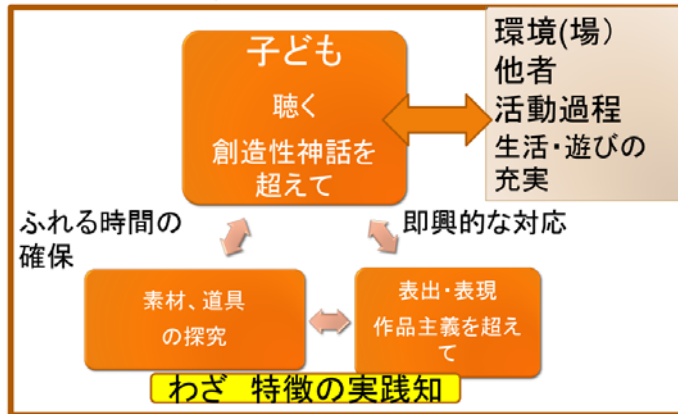
## アートを指導する技 (Samuelson et als,2013)

学びの対象 **重要な特徴**  
バリエーション(保育者、素材、子ども、環境、素材)多様性

美しさ等の事象の重要な側面を実感し学ぶことの大切さ  
ダンス:押すー引く、静と動 緩急 強弱の動き 広いー狭い動き  
詩:韻律、metro、比ゆ、換喩

言語化して教示するのではないが、識別やバリエーションに  
タイプわけ、比較等の経験を通して気づいていくこと  
共感覚 子ども自身がその感覚を発達させていく

## 子どもの表現と保育者の表現の響き合い がうむアート実践



## 表現の発達心理学研究に向けて

- この作品主義から場や活動との関係を見る
- そこで生まれる情動と身体の動きへの注目
- 素材の固有性と学級の歴史性
- 保育者側に何が求められるかは必ずしも心理的には解明されていない
- アートの実践知研究へ

## 今日的アート概念とプロセスにある意味 相山女学園大学教育学部 磯部 錦司 先生

今日はどういうふうにして言葉にしようかなって、昨日、考えてたことが、(秋田先生の話を受けて)「こういうふうに解釈したらいいのか!」と、「こういう言葉があるのか!」っていうのを。どうです?美術の先生方。ちょっと「あっ」って思ったことがありましたよね?

さっき、喜代美先生が言われたところでいうと、内面の現れだけでなく状況の中で生まれる子どもの活動と言われたわけですけども、私が考えていたのは、それを一言で言うと「生活というアート」という言葉かなあというふうにして、今日は提案してみたいと思います。最初に一つちょっと触れておきたいのは、心理と美術の関係ですよ。これは平田先生から教えてもらったんですけど、戦後、これだけ内面にかかわる両者の研究領域はなかなか一緒に今まで関わってくることはなかったと。で、これ(今回のシンポ)は戦後かなり貴重ではないかと思うんですね。で、ここに至ったっていうのはやっぱり必然性があるって、やはり私たちの領域で言うと、アートというものを人間の生きる営みの自発的で能動的で生得的でもあるぐらいのところで考えていたい。で、そこを考えていくと人間の内面というものに関わることになってくるし、学びや発達というのにも関わってくる。関わらざるを得ないというわけですね。今日はその中で、アートするということのプロセスをいかに意味づけていくか、言葉にしていくかということだと思うんですけど、今回は幼児を中心に学びや生活を豊かにするプロセスそのもの、つまり、子どもの生活そのものをアートとしてとらえて、7つの段階からその意味を検討してみたいと思います。

ちょうど谷戸幼稚園にお邪魔してから10年ぐらいたちますかね、本当に変わってきたんですね、保育がね。というかその進化というのはすごいなと思うんです。ちょうどその事例があったので、そこから始めてみたいと思います。まず、物と一体化していくっていうところの行為です。他者とかかわるということ、他者と一体化することにおいて、今日は心理の人がいるから自己存在感とか自己認識という言葉は恐ろしくて使えませんので、それをどういう言葉でアートの側から言葉にするかということを考えてみたいです。土(映像「土山」)だけでなく人間とも、そこに一体感が生まれたときに、そのものへの信頼、人への信頼。それが、その一体化が他者への信頼感が今日の言葉で言うと「自分見つけ」ではないかと思います。この「自分見つけ」というのは、実際聞いてて、「あ、これかな?」というふうに思うんですね。そこに他者と一体化しなければ、「私」は見えてこないですし、そこからまず「私」の存在感への構築が始っていくのではないかとことを子どもたちから読み取ることができるんですね。もう少し見ていくと一体感の中でたとえば、土山でいうとこれ必ずと言っていいほど、イメージが出てきますよね。他者への一体感の中から、色・形をつくり出し、イメージをつくりだしていく段階ですね。そのイメージをつくりだしながら、私たちの領域でいうと「美」という言葉は本当に慎重になる言葉なんですけれ

ども、今日ボンボン出てましたので、ドキドキしたんですけども、このプロセスの意味をいつも言うていくときに「美」という問題をどうとらえるかっていうことを私たちは常に問題にしてきました。一言でいうとその意味をつくっていくところにその「美」というものが子どもたちの中にもあるということを今日は見させてもらいました。

あの土山の事例の中でさらに次の段階として、感覚を共有しながらイメージが共有されていくということですね。そのイメージの共有の中で、私は「表現の生活化」と呼んでいるんですけども、「土山を拠点にした生活」という人もいるかもしれないし、じゅんこ先生だったら「これもアトリエよ」というかもしれないし。つまりそこに起こる出来事や物や人との関わりが、生活そのものが、そのプロセスその空間その時間そのものがアートであるというふうにとらえてみたいということです。これはちょっとおもしろいんですけども（映像「保育室の土山」）、その土山を拠点にした彼らの生活が、保育室で先生が段ボールを用意してやるとそこに土山をつくりだしたんですね。もっとおもしろいのはその土山にかかっている絵が彼らの土山の生活なんですね。その生活をリアリズムでかくだけではなくて、そこに彼らの物語があり、願いが生まれているってということです。ここに何をみるかっていうと、その1年間続いていく土山を拠点にしたその生活がその中においてみられます。文化をつくりたいとか、社会をつくりたいとかいう、その原初的なものがここに見えるのではないか、つまり、人間が動物の絵を描いたときのような、生活、文化というものが発生していくような、それが自発的に生まれているというところが興味深いところです。それが土山でなくても、水なら水の、風なら風の、光なら光の、絵具なら絵具との一体感の中で、その世界は広がっていくということですよ。

絵具のことについてももう少し見てみたいんですけども、例えば、どうして体に絵を描くのかってところはいろんな説があると思うんですけども、まあ必ずといっていいほど彼らは、まず初めて絵具に出会ったときは、身体に塗っていきますよね。それを見てみると自分の存在を確かめているようにも確かに見えるわけです。さっき言った自分見つけ、つまり、ものへの信頼感から自分見つけが始まって、それが十分されてくる子どもたちは本当に絵具をのびのびと使っていきますよね。その中で描くという行為へとつながっていったって、ここに出てくる一瞬一瞬の色と形という痕跡が自分の存在を確かめているようにも見えるわけです。そうして描くことによって色と形が生まれてくるわけです。これをもっと下げて0歳の子どもたちからその様子について少し見てみたいんです。そもそも2歳ぐらいの意味づけ期からが表現と呼ばれていて、それ以前は身体との協応であって表現ではないということが、テキストや教科書には書いてあるんですけども、それはおかしいんじゃないかってことです。

たとえば、描くという行為の中で見ていったときに、この子はテラスに水たまりがあって、（映像「0歳描写」）「べしゃべしゃ」やってましたね。ここに描くというイメージがあるわけではないんですけども、そこへB君がやってきましてですね、そこで隣に足跡をつけていったんですね。そしたら彼はじーっと見ていて、その足跡を見てこう自分もつけ

だしたわけですね。つけていってここの真ん中あたりにですね、ここの真ん中あたりで立ち止まって自分の後ろを見るわけです。そして新たな一步をだすわけです。この0歳の子どもこの後ろの足跡と前の足跡では意味が違うのではないかっていうことです。これは確かに身体との協応によって生まれた足跡かもしれませんが、そこを見て一步だした足跡は、意識をし、そこに何らかの思考があって出した足跡ではないかと読み取ってみたいわけです。担任の先生はここに足や手や指で描くならば、これを絵具でかいたらどうだろうというふうにして0歳でもフィンガーペインティングは始まっていくわけです。もう一つ0歳の事例をみてみたいのですが、これは多摩川保育園なんです、食紅でつくった小麦粘土を先生が用意してあげて、ペットボトルの中に彼らは入れていったそうなんです。最初は近くにあったものを入れていたんですけども、だんだんと色を選びとって、遠くにある自分のほしい色を選び取ってそれを中に入れていく。そのペットボトルに先生は水を入れてあげて、そして色水にしてあげて、高いところにかざったわけです。そしたら、「これ私のよ」と言葉は話せませんがこう指を指すそうです。つまりそれはマイアートっていうか、これは私の作品、つまり自分のアート、つまり自分の痕跡、自分の存在、まあ存在とっていいのかはちょっと不明ですが、という主張であり、それ（ボトル）を抱えるわけです。これを見たときに、例えば、0歳の中にも、彼ら自身の中に意識や思考、イメージを伴った表現が繰り返されている、それは表出と表現が絡み合って繰り返されている。ただ、残念ながら彼らの身体的な機能には限界があるということです。そこを言葉にしていけないと、意味が見つけられないというのが私たちの仕事ではないか。

ちょっと花（映像「花」）で見たいんですけども、園庭にある花ですね、これ花がそこにあるだけだったら、まあものとしての花なんですけれども、彼は単なる花を拾うわけです。視覚から花を感じて、そして手にとり、感じたところにおいてそれを木の隙間に置くわけです。この花は、そこに置いた花はもうものではなくて彼のアートである。意味が違う、そこにあった花と、この花は同じ花でも意味が違う。これをどういう風に説明するかと考えたときにイ・ウーファンの言葉を借りれば、「その子どもの身体が媒体となって自分の内と外の場を行きしながら、花を置くという行為によってその子は自分の存在を表している。」これはイ・ウーファンの言葉です。さらに彼の哲学を引用すれば、「すべての人間はこのような出会いの場、詩的瞬間に生きる表現者である」と。これは私の言葉なんですけれども、「ましてや外の世界に素直に身体を抱くことができる子どもたちは、すぐれた表現者ではないか」と。そういう行為を子どもたちは日常的に繰り返していくわけです。

もう少し2歳ぐらいの子をみてみたいと思います。だんだんイメージの世界へとつながっていくわけなんですけれども、ここで重要になってくるのは、さっきもじゅんこ先生が言われてた、「非言語のアートが共通言語」というか、コミュニケーションのツールになっていくところです。この子は言語が日本語ではないけれど、「ねえねえ見て見て」（映像「絵を見せる子」）というわけです。それで、お話聞かせていただけないでしょうかと伺ったところですね、教えてくれました。つまり、これは保育者であれば日常かもしれませんが、

子どもたちは必ずしも初めにイメージがあって、かきだすわけではないんですが、今まで見てきたように、ものとの出会いやかかわりから、生まれてくるんですけれども、描き終わったときには、伝えたいことが往々にしてある。そこにもうひとつ重要なのは、それを伝えたい人がそこにいるのかってことです。これがコミュニケーションということを考えていくときに、アートがイメージとイメージを伝えあう文化をつくっていくんだというところにおいて、重要ではないかと思うわけです。

イメージとの関わりでもう少し見ていきたいんですが、さっきの福田さんのところの、音ですね。(映像「音の絵」) ブランコの音、この実践と作品は本物を私も見させていただいたのですが、「音は聞こえんけど見えたのを絵にかいた」。すごいですね。「哲学者じゃのう！」って感じですよ。この作品に注目してみたいんだけど、これは「風の音“しゅっ”って音。ほら葉っぱがゆれる。雨が空から降ってきた。やまももをたべた。雨は“ぴゅっ”って音。黒いのはなあに。おばけ。森のおばけ。森の中のおばけがいじわるやった、おうちをこわしてね」とその物語は続いていくわけですね。つまり、この一連の中での、この出口としてあるその絵の中には、言葉と造形と音が結びついていっているということです。さらにその作品だけでなくそのプロセスの中を見てみると、子どもの興味関心から始まって、子どもがつなげて広げていくというところなんです。さらにもう一つ言うならば、当然なんですけれども、そういう保育の展開の中に、プロセスの中に表現が生まれるとするならば、一人一人の表現は違う、大前提として違うってことですよね。この大前提が日本の幼児教育には本当にあるのかと問うてみたいところです。その3つの条件において、今まで出てきたマイストーリーですね、私のストーリーが展開していくのではありませんか。じゅんこ先生や伊藤先生も福田先生も言われていた、その子のストーリーが展開していくのではないかと。

その子らしさっていうのをもう少し見てみたいんですが、赤碕にちょっと興味深いものがあったので。(映像「虹の空へ行きたいな」) これはさらに絵がどう展開しているのかっていう、音がどう展開しているのかっていうところなんですけど。この子は「虹の空へ行きたいな」っていう、タイトル違ったらごめんなさい。要するに太鼓で音をつくっていくわけです。そのはじけた音が、虹の空に届かないかなって、どういう音だったら届くんだろうかと、どういう素材にしたら届くような、突き抜けていくような音になるんだろうかって、そういう素材から自分で探していくわけです。その素材を見つけ、色を見つけ、そして叩いて、空に音が飛んでいく、虹の空に飛んでいく世界をイメージしていった。そこにその子のストーリーの広がりを見るわけなんです。

(映像「2歳児の写真」) ちょっと2歳児に戻るんですが、先ほどの中でも出てきたんですが、子どもを知るってことですよね、じゅんこ先生が言われたその知るってことなんですけれども、2歳児このカメラを使って遊んでいたんですね。赤碕にその写真集があったもんですから、見せてもらったんです。2歳児の写真集です。その子は、初めは先生の写真に興味持ってやってて、そして、自分でカメラをつくって、そして先生が本当のカメ

ラを貸してやったら、写しだすんですね。ちょっと見ていただきたいんですけども、この視点がまことに興味深いというか私たちとは当然異なる視点であり、その子らしいなあと。ちょっとピントがぼけてるのはしょうがないですね。この構図ですよなやっぱり。これは、教えるものではないのかもしれないが、これテーブルの上ですね。(映像「テーブル」) 現代美術でいうとなんでしょうかね。これもおもしろいですよね。すきまのキャラクターをとっているんです。(映像「タオル」) 同じものをとるにしても僕たちの視点とかなり違ってきますよね。これ(映像「地面」)、園庭に水が流れているところなんです。その道をとっている。これ 2 歳児です。これは石を投げた水辺にうつる自分や風景ですね(映像「池」)。空。これは大人のような作品ですよ。これ(映像「自分」) は作者です。まあ、やっぱり同じ風景でも視点が違う。これは水槽の中の手(映像「すいそう」)。

そういう風にしてイメージの世界を深めて広げていくってことは永遠に続いていくわけなんですけれども、それを仲間との関わりで少し見てみたいわけです。これ(映像「私たちの動物園」) は 5 歳児が、動物園に行って帰ってきたときにみんなで描きだしたところですね。じゅんこ先生のところは忍者を描いてましたね。ちょっと違うのは、感覚を共有しながらも、イメージがここには共有されてきている。そして、じゅんこ先生のところも一緒だったかもしれないんだけど、例えば、このカメに注目してみると、これ三人でカメかいてるんですね。一人がカメをかいてどっかに行ってる間に誰かが来て甲羅にカメを書いて、違う次の子がきて顔にカメをかいたっていう。それらが共有されていく、つまりその場が共有され、テリトリーを破って、「私の色なんだけど、友達の色でもある」という共有がされている。これは先ほど見た、土山の事例でもそうですよね。一体化するという中から感覚を共有しながら、イメージを共有し、ごっこ遊びにいったわけなんです。それは土山じゃなくたって、砂場もそうだし、保育室の中だってそうだし、アトリエもそううだろうし、私の言葉で言えば、これも「生活というアート」のすべてであり、プロセスであり、時間であり、場所であるということです。

さらに見ていくと、隠れ家が説明しやすいので、使わせていただくとこれも赤碕なんです。生活空間に居場所を見つけ、仲間と空間をつくり出したときに、隠れ家をつくり、そこに必ずといっていいほど今度は、隠れ家を飾っていくわけですね。この子たち庭をつくりましてですね、日本庭園をつくっていたわけですね。それで生活が始まっていくわけです。これも確かにごっこ遊びなんだけれども、そこに自分たちが生活を新たに創造しようとする。そこを飾り、そこに生活し、文化を創造しようとする。一緒になにか文化をつくろうとする、一緒によりよい社会をつくろうとするその原初的な現象がここに見えるのではないのでしょうか。つまり、それは、彼らに教えたということよりも、生得的に、自発的に生み出している、つまり、共に生きたいとか、共により意味のあるものを生成したいというのは、生得的にあるのではないかと。

ちよつとこの事例おもしろいので、いろんところで話させてもらったんですけども(映像「園庭のお神輿」)、これはおみこしの事例なんですけれども、園庭で 4 歳児が、5

歳児が踊ったりかついだおみこしを見て、その文脈の中で、彼らは僕らもつくりたいって言うてつくり始めた。これはよくある状況なんです、自分たちのおみこしを自分たちが神になって上に乗ってみたいって、「神は自分だ」みたいな。それでおもしろいのは、昼休みに、5、6人でつくって、つくってはまた遊び、人が入れ替わり続いてつくってました。自由遊びの時間が半分ぐらいすぎると、集まってきてかつぎだすわけですね。「わっしょい、わっしょい」って園庭をかつぎだしていくわけです。そうすると4歳がいっぱい集まってきて、みんなでかつぎだしていく。そしたらですね、もっと興味深いのは、砂場にいたひたすらカップで遊んでいた3歳児と一緒に口ずさみながら、その空間に参加していくわけです。園庭の真ん中で遊んでいた5歳児たちも、「わっしょい、わっしょい」って言うわけですね。そしてそれが、今日も明日も明後日も毎日毎日繰り返されるというわけです。外遊びの時間の途中になるとかつぎ出して園庭中がお祭りになっている。そしてそれが終わると、途中で先生は気づいたらしくて、その5歳児が踊った音楽を流んですね。そうすると踊りが始まっていく。その踊りがおわると彼らは保育室に入っていくという。それが昨日も今日も明日もこう繰り返されていくっていうわけです。そのドラマの中に、先ほどいった文化をつくる、自発的に社会をつくるというその根源があるぞと思うわけです。それをどう保障していくのか、どう環境として援助していくのかというところを思うわけです。それは秋田先生が具体的に言われて分かりやすかったと思うんですが。ちょっと時間が来ていますので。

もうひとつの段階としては、小学生後期に来れば、たとえば自分のメッセージや伝えたいことや、社会に対するクリティカルなことや、現代社会と対峙する問題としてのメッセージ等を彼らは、表現していくことも可能なわけです。それはリアルに生活世界を見ていくっていうことも一つの展開として広がっていくだろうし。さらに、一つ私が思うことは、「生活というアート」という言葉の中には、たとえばとても大胆な言い方かもしれないんですけど、その保育室自体が、それ自体がアートだと。つまり、社会や文化を創造していく、創造的な活動を、意味をつくり出していくその活動自体がアートだと。それらも社会的創造的活動というアートするならば、砂場もしかり、保育室もしかり、そのすべてをその見方で見ていきたい、見ることができるのではないかな。

最後になりますが、これ（映像「つながり」）そこの団地で先週の日曜日おこなったものですが、つながりの弱い団地の中で子どもたちと一緒に「木とつながろう」というテーマでやってみました。アートがささいかもしれないけど、その地域において何かをつなげていく。でももっとすごいのはその保育室においては、もっと意味のあることが生成されている。そこを私たちはもっと掘り起こしていけば、個人の人間形成の問題だけじゃなくって社会を、文化を、つくっていくという視点から新たなアートの今を見つけられるのではないかな。これはレジャージョへ行ってもそう思いましたね。レジャージョは何がすごいかって、レジスタンスから始まる共同体がよりよい社会を目指すところにおいて、教育というものに目を向けて、それを創造していこうと考えたところなんです。今日見てきた3つの実践も、も

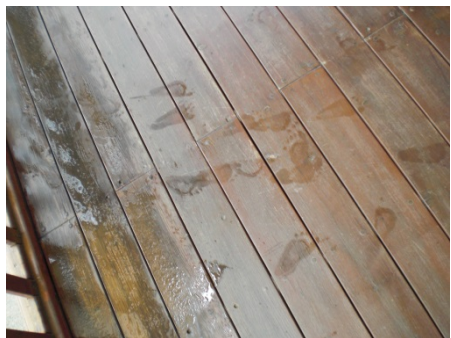
っと引いたところから見れば、まさに社会的創造活動そのものではないかと思うわけです。  
私が今日1番言いたかったことは、そこです。以上です。ありがとうございました。



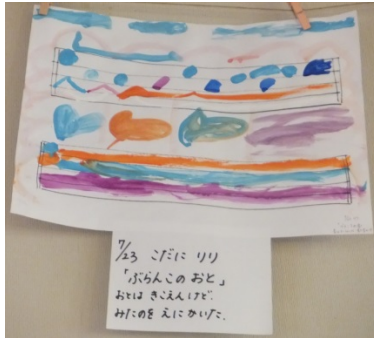
「園庭の土山」



「保育室の土山」



「0歳児の足跡」



「ブランコの音」



「虹の空へ行きたいな」



「2歳児Nの写真集」



「私たちの動物園」



「園庭のお神輿」